

E-0287

0006

米局

局長 高外第三〇一號

昭和八年一月廿六日

關東總督 湯島 局長

昭和八年一月廿六日 受

特 秘

拓務次官 官 殿
外務次官 官 殿
管下各官 官 殿

「昭和十五年ノソヴェート經濟」ニ關スル件

(在官事務官報)

ボリシエビ呼聲以外ノ呼聲ニアリテソヴェート經濟ノ最モ公平ナル此列者ト稱セラレルユーゴフハ現在ロシア社會民主労働黨(ボリシエビ

1 (本館 12, 20, 21-16)

守)機關誌「社會主義時報」ニ據リテ隨時意見ヲ發表シ居レルモ同人ノ意見ハ各陣營ノソヴェート研究者ニトツテ尙モナク其ノ著書ノ各國語ニ翻譯刊行セラレタルモノ多シ。首題ノ論文ハ同人ノ最近ノ著書ニナルモノニシテ其ノ譯文左記ノ通りニ有之相當首肯シ得ヘキモノアリト思考セララルニ付御參考迄

過去十五年ノ聯邦經濟

ア、ユーゴフ

(社會主義時報一九三二年第二十二號所載)

最近十五ケ年間ニ於テロシア經濟ニ發生シタ事情ヲ批評シソノ中最モ注ナル現象ノミノ決算ヲ行ツテ見ルナラ客觀的研究者ハ誰シモ同期間ニ於ケル生産力ノ急速衰ノ増加ヲ認メサルヲ得ナイ大革命ハ數百萬大衆ノ創造力ヲ實際ニ動カシ彼等ノ需要ト積極性トヲ刺激シ以テ經濟ノ急進度ニシテ且ツ多角的發展ノ端緒ヲ與ヘタ。「經濟的遲滯克服」ノコノ急進

度ノ過渡ハ吾々ノ意見ニ依レハ十月革命前即チ一九一七年ノ帝政崩壊ト
農業革命後始マリボリシエビヤノ革命ノ凡ユル曲折ヲ經テ今モ尙續イテ
キル。

經濟機構ハ極端ニ變化シタ。世界戦争ノ遙カ以前ヨリ始マツタヨシマ
ノ工業化ハ戦争ト戦時共産主義トカ齎ラシタ破壊ト退化トカ根柢サルル
ト共ニ再ヒ復活サレタ。異ナレル目的ト異ナレル社會的利益トヲ以テソ
ヴエート政權ハ勿論ソレカテンボト規模ニ於テ戦前ノ獎勵策ヲ幾倍モ超
過シテハイルカ、ウイシネグラドスキーヤウイツデニ依リ始メラレタ工
業獎勵策ヲ多クノ點ニ於テ繼續シテキル。

五ヶ年計畫ニ依ル工業ニ對スル融資計劃ハ既ニ過去四ヶ年ニ於テ豫定
計畫ヲ超過シテキル、即チ向期間ニ於テ工業基礎建設ト電化ニ對スル投
資額ハ二百六十億留以上(計畫經濟一九三二年第三號)トナツキル。

國民經濟ニ於ケル工業ノ比重ハ著シク増加シタ。一九一三年ニ於テ工業
ハ全生産物ノ三八%ヲ占メタルニ一九三一年テハソヴエート統計ニ依レ
ハ六八%以上ヲ占メテキル。勿論コノ數字ハ工業ノ變化ニ對シ正シイ概
念ヲ與ヘナイ。何トナレハ工業生産物ト農業生産物間ノ價格相互關係ニ
於テ差異カアルカラテアル。然シナカラ工業生産品カ現物量ニ於テ莫大
ナ増加ヲ示シ、過去十五ヶ年間ニ於ケル農村生産品ノ著シク値少ナル増
加(牧畜業テハ退化現象ヲサヘ見ル)ヲ考慮スレハ國民經濟ニ於テ工業
生産品ノ比重カ増加セルコトヲ認メサルヲ得ナイ

ロシア工業ハ戦前ニ於テモ多數ノ大工業企業ヲ持ツテキタカボリシエ
ビキト政策期ニ於テモ生産ノ集中化ハ著シク増加シタ例ハ一九二六年
ニ於テハ一計畫企業ノ労働者平均數ハ三百二十名ナリシカ、一九三二年
ニハ五百名以上トナツタ。又労働者數三千名以上ヲ有スル企業數ハ一九

三〇年ニ至企業ノ二、二のナリシカ、一九三二年ニハ五、七のナリシケル

大多數ノ工業部門ハ最近數年間設備ノ根本的置キ替ト技術ノ進直シヲ行フタ。政府ノ統計ニ依レハ全工業ハ戦争後其ノ設備ノ六〇、二のヲ新タニシエネルギーセントル燃料工業機械工業系企業ハ其ノ設備ノ六〇乃至七〇のヲ新ニシテキル（計量經濟第三一四號）過去數ケ年ニ於テ設備者一人當リノ動力武裝ハ八〇の増加シ電力武裝ハ二倍以上増加シテキル（米國ニ劣ルコトニ。四指テザル）コノ技術的進直ノ結果工業資本ノ有機的構造ハ向上シコレニヨリ將來ニ於ケル急速度發展ノ前提ヲ作ツテキル。

ボリシエビキ出版物ハ生産ノ世界水準ノ「追越シ」状態ヲ證明スル統計表ヲ備マス作成シテキルソウヱイトノ經濟教科書テサヘモソウヱ

ト新聞記者ニ對シ種々ノ原因ニ依リ建設熱ト企業熱ノ時代ヲ經過シツツアル國ノ經濟發展ノ速度ト水準トヲ最深ノ經濟恐慌ヲナメツツアル諸國ノ速度ト水準トニ比較シテハイケナイト説明セサレ得ナカツタ。ソレノミカ好景氣時代ト恐慌時代トヲ包含スル全經濟的循環ノバランスノミヲ比較スヘキト言フコトハ人ノ知ル所テアル。コノ意味ヨリシテ鋼鐵生産、石油生産及機械製造カ一九三二年度ニ於テ世界第二位ニ進出シ探炭及化學品生産カ第四位ニ電力カ第五位等々ト云々スルコトカ確乎タラサルモノテアルト考ヘラレルカトハ言ヘ戦前ニ於テロシヤ工業ト先進工業國トヲ違サケタ距離カ著シク縮少シタコトハ疑ヘナイ

幾多主要部門ノ生産額ハ過去十五ケ年間ニ二一三一四又ハ六六倍ニ増加シテキル。生産財ヲ生産スル部門ハ特ニ發展レテキル即チ機械、器具ノ生産ハ最近四ケ年間ニ四・三倍、鍛造機械製造ハ三・一倍、農業機械製

造八五、四倍、化學工業ハ二、五倍ニ増加シテキル。コノ外邦ニ自働車
トラクタ―生産カ勃興シ發展シタ。外國製機械及外國製設備品ノ輸入必
要ハ著シク減少シタ。

五ヶ年計畫ヲ豫定セル蘇聯邦工業化プランカ百%遂行サレタト云フ邊
度ノソヴエート計畫原隨者連ノ言ハ勿論正シクナイ。ソヴエートノ統計
ヨリシテモ斯カル結論ハナシ得ナイ。又五ヶ年計畫案ノ過去四ヶ年ニ於
ケル遂行率ハ七〇―八〇%ナリト結論セル政府統計モ現ニ豫定中ノ企業
ニ就テ正シイ觀念ヲ與ヘス新建設ニ就テハ尙更ノコトテアル。ソヴエー
ト統計ハ工場カプロクタラムノ七〇%建設サルレハ計畫ハ七〇%遂行サレ
タト考ヘテキル。只個々ノ職場ノミカ出来又設備カ出来テモ動力機械カ
無カッタナラハ(又ハ之ト反鉅ノ場合ヲ考ヘテモ同様)或ハ又建設ノ必
要部分カ備ハラナイトシタラ吾人ハカカル工場ヲ計畫ノ七〇%ヲ遂行シ

テ活動スル生産單位ト稱スルコトハ出来ナイ。又現ニ豫定中ノ企業ニ於
ケル生産モ國民經濟ノ見地カラ見テ完全ナル效果ヲ得ケテモナイ確乎タ
ル單一計畫ノ缺陷、各部門ノ不均衡コソソヴエート經濟ノ主タル弊病テ
アル。工場―需要者ニ取ツテ必要テナイ寸法ノ機械カ屢々製造サレ難
鋼鐵生産ニ於テモ要求セサル質ヲ有スルモノカ精製サレテキル。又機械
ハアルカ部分品カナク機械製造業ハ充分ノ金屬貯貯ヲ有セス冶金業テハ
石炭カ不足スルト云フ有様テアル。又鑛鑛爐ハ急遽閉テ廢止サルルカ、
コレカタメニ鋼鐵、鑛鑛製造工場ノ建設カ延期サレ一地方テハ電力ヲ供
斷セラレサル工事カ出来ルカト思フト他地方テハ需要者ノナイ巨大な發
電所カ建設サレ技術家ト熟練労働者トカ不足シ又彼等ニ對スルテカナ
住居ト食料カ不足スルト云フ有様テアル。

ソヴエート生産ノ第二ノ慘酷ナル敵ハ生産品ノ品質アル。不合格品



ノ率ハ凡ユル標準ヲ超過シテキル。機械等ノ使用年限ノ縮小ハ生産穩定ノ破綻ヲ導クコト著シイ

凡テコレ等ノ状態ハ工業化デシテ資本カ不相應ニ公表サレ、努力エネルギート國民財ノ著シイ部分カ無駄ニ消費サレ「死物化」スルコトヲ證明スルモノナアル。然シナカラ之等ノ状態ハ兎ニ角、工業資本資本ノ莫大ナル増加生産品ノ著シキ増加並ニ合目的ニ且ツ生産的ニ操業スル企業數カ著シク増加シタト云フ事實ヲ反駁スルモノテナイ。例ヘハ生産物増加カソヴエー出版物ノ確認スル年平均一八一二五%ニ非スシテ一〇一%ニ少トシテモ又例ヘ個々ノ部門カ四及六倍ニ増加セシテ僅カニ倍増加シタニシテモ此等ノ速度ハ世界工業及戰前ノロシア工業ノ平均發展ヲ著シク超過シキルテハナイカ!

過去十五ヶ年間ニ於テ私營工業ト私營商業ハソヴエー政府ノ政策ニ

依リ全ク根絶サレタ。國家ハ國內ノ全經濟機關ニ對スル指揮ヲ自己ノ手ニ集中シタ。工業プロレタリアノ比重ハ増加シ都市及工業中心地ノ人口ハ著シイ急速度テ増加シタ。地主及資本家階級ハソヴエー政府ニ依リ強制的ニ根絶サレ商人層プロレタリア層小企業家ブルジョア層ハ殆ト全ク影ヲヒソメタ。過去ノ労働者群ト無所屬軍カラ勤勞官俸主體者層カ出來タ。インテリゲンチヤハ「自由職業」ノ代表者タルコトヲ中止サレ、ソヴエー政府ノ組織的壓迫ニヨリ國家機關ト經濟機關ニ勤務スル專門家ノ地位ニ置カレタ。

戰前ロシアハ主トシテ農業國ト考ヘラレ、其ノ工業ハ貧弱テ凋落シテ、キタカ現在ノロシアハ農村經濟ト共ニ規模大ニシテ先進ナル工業ヲ有スル國ニ數ヘラルヘキナル。

之等ノ構造的變化ヨリシテロシアカ米國ト同様孤立鎖國經濟ニ任ムコ

トカ出来ルト主張スル經濟學者ニ同意スルコトハ出来ナイ。勞働ノ實際的分配原則即チ資本ト云フモノハ其地方的關係ニヨリ經濟的ニ昇テ合目的ナルトコロニ投下サルヘキ性質ノモノテアルト云フ原則ト各階カ相互ニ密接ナル經濟的關係ヲ有スルト云フ原則ハ最近ノ經驗カ證明シタ如ク米國ニ取ツテモ命令的テアル、コノ兩原則ハロシヤニ取ツテモ早晚命令的トナルテアラウ。然シナカラ現代ノロシヤカ特別好都合ナ富源ニ據成トワ有スル多カラサル國ノ一タルコトハ疑ヘナイ即チロシヤハ越境大ニシテヨク設備サレタル工業ト主要國內原料ヲ持チ幾何テモ精明ナル政策ヲ行ヘハ必要ナル食料生産品ト莫大ナル容積ヲ有スル國內市場トヲ持ツトカ出来ルノテアル

11

農村經濟ニ於テモ大變化カ生シタ。小規模ニシテ慢性的ニ有餘的ニ出失廢チ農民經濟ハ殆ト影ヲヒソメタ。農民經濟ノ三分ノ二ハ大規模ノゾ

フホズ、コルホズテ置キカヘラレ其ノ耕作面積ハ全播種面積ノ八〇%以上ニ達シタ。古イ主從的經濟制度ハ益々死滅シツツアル機被ト農藝技術ハソウエート農村ノ農村經濟過程ニ於テ優越的役職ヲ演シツツアル。一九二八年ニハ約五百萬ノ原始的耕作器(犁、鋤、二輪犁)カアツタカ、一九三二年ニハ耕作地ノ九〇%以上ハ機械犁ヲ耕作サレタ。一九二九年ニ於ケルトラクターニヨル耕作面積ハ全播種地ノ五%ニ過キナカツタ。一九三二年ニ於テハ四十五%以上ニ達シテキル。吸糞機、播種機、或ル地方チハコンバインハ其ノ利用ニ於テ合理性ノ少ナイ農具器具ヲ駆逐シ始メタ。輪作農業ハロシヤノ普通農法タル三圃法ヲ驅逐シ始メタ。綿、甜菜其他ノ技術栽培品ノ耕作地及收穫量高ハ戰前ノ水準ヲ著シク超過シタ。穀物播種面積モ例ヘ其ノ増加カ上記栽培品ニ比シテ著シク遅々タルモノデアツタニ不拘、一九三一年迄兎モ角増加シテ來タ。一九三一

12

三二兩年度ハソヴエート政權ノ穀物買付政策ノ結果、退化現象ヲ呈シ之レハ先ツ第二ニ播種面積ノ縮少ト穀物買付量ノ縮少ニ表ハレタ。強制的集團化ノ結果、労働用大小家畜數ハ減少シタカ同時ニ工業用家畜數ハ大イニ擴張シタ。

農村經濟全體ノ基礎資本ハ強制的集團化ト聯連シテ生セル状態ノ結果ソヴエート政府ノ統計ニヨレハ全部テ五十六倍増加シタニ過キナイ。然シナカラ國家投資一四ヶ年ニ一百二十億余一計總經濟一九三二年三月號一ト一部ハ個人經濟ヨリノ「沒收」ヲナシタオテ所謂共同化經濟ノ基礎資本ハ非常ニ急速度ヲ増加シ、過去四ヶ年間ニ殆ト六倍モ増加シタ。政治的、經濟的要素ノ影響下ニ農村ノ社會的態樣ハ根本的ニ變化シタ。新シキ農民層「コルホズ」農民カ發生シ支配的役割ヲ演シ始メタ。従前地リ其ノ利益ヲ守ルタメニハ個人農トシテ殘ツテキルコルホズ農民ハ其ノ

労働状態ト生存状態ニヨリ突撃隊、コルホズ、ソヴエート兵カ押シツケタ新形式ヲ獲得シタ。機械ト農村經濟技術ハ農民心理ニ於テ以前ニ比シ著シク大ナル役割ヲ演シ始メタ。富農ハ農村ニ於テ專イテトナリ決定的役割ヲ演シナクナツタ。日僱農民ト土地無所有農民ハナクナツタ。古い世紀的農村ノ風習ハ挫カレ、老人トミル制度ハコムソセル目トコルホズニ席ヲ譲ツタ。農民ノ被制限性ト政治的中立性ハ消滅シタ。革命前ノ農民ノ希望ハ自己ノ僅少ナル土地耕作ノ清算ニ向ケラレテホタテ理不テハコルホズ農民モ個人農モ先ス第一ニ自己ノ労働ニ依ル生産品ニ對スル權利ヲ擁護セント努力シテキル。農民ノ大多數ハ政策ニ影響ヲ及ホスタメ闘争スルコトノ必要ヲ認識シテキル。

× × ×
吾人ハ蘇聯邦國民經濟ニ於ケル生産力増加ノ事實ヲ即チ工業ニ於テ

リ急進度ニ農村ニ於テヨリ過々トシテ増加シタ事實ヲ主眼シケル。ソヴェ
 ー政策ニヨリコノ生産力増加ハ先ツ第一ニ工業基礎資本ノ強大ナル事
 トシテ現ハレタ。而シテ其ノ發展ニ於テソヴェエト政權ハ革命ニヨリ生
 レ自己ヲ社會主義的政權ト稱シテキルニモ不拘、其資本主義的政權ヲハ全
 資本主義諸國ニ於ケル「最初ノ蓄積」過程ノ遂行方法ト殆ト差異ノナイ
 方法ヲ以テ遂行シテキル

工業化計畫ヲ遂行スルタメニ毎年國民經濟中ヨリ莫大ノ金額カ撥出サ
 レタ。五ヶ年計畫實施以來其ノ額ハ全國民收入ノ四〇―五〇%ニ達シタ。
 國民ノ消費需要ト社會―文化的需要ニ對スル融蓄ハ相對的ニ益々減少シ
 工業ノ經濟的目的ニ對スル投資ハ益々増加シタ。
 工業内ニ於テモ投資ハ主トシテ重工業需要トソヴェエト經濟ノ現在需要
 カ打撃ヲ蒙ムルトコロノ長期投資ニ向ケラレタ。長期投資ノ目的トシテ

消費サルト國民收入ノ率カ如何ニ大ナルカハ次ニ掲クル比較數字カ示シ
 テキル。

國名	年次	長期投資ノ國民所得ニ對スル率
獨逸	一九二四―三〇	七・七%
英國	一九二〇―三〇	四・〇%
米國	一九一九―二九	一〇・一二%
ロシア	一九二九	一九・六%
	一九三一	二八・一〇%

(ソヴェエト經濟調査會ノ調査ニ依ル)

ソヴェエト政權ハ一九二九年迄師チ「根本方針」樹立ニ至ル迄一筆積
 ヲハ主トシテ農村ニヨリ行ツテキタカコノ農村貯蓄カ消費サレルニツ
 レコルホスト富農清算ニ依リ農民ヲ搾取シ續ケ労働者大衆ヲモ彼等ノ能

資ノ大部分ヲ組織的ニ且ツ益々露骨ニ没收スル對象ノ中ニ増カントスル
方法ヲ取ラサルヲ得サルニ至ツタ。

一九三二年五月二十日ゴスブラン經濟調査會ニ於テラゴリスキー氏ノ
報告ニ關シ討論カ行ハレタカ、同討論ハグロイーマン及バザロフノ「有
害」思想ヲ既ニ掃蕩セル現在ノゴスブランニ於テサヘ基礎建設ニ對スル
融資ハ農村收入ノ搾取ト勞働者消費ノ著シキ部分ノ没收ニ依リ行ハレ
テキルト云フ意見カ廣汎國ニ展マツテキルトヲ證明シテキル。討論發
加者ノ一人ハロノ「没收」カ如何ニ豫定標準ヲ超過ナルカヲ示シタメ一
國民所得額カ過去四ケ年間ニ五ケ年計豫定額ニ達セサルニ基礎建設ヲ
目的トシテ行ハレタル「没收」額ハ五ケ年計量第五年目ノ額ヲ超過シテ
キル」事實ヲ指摘シテ注意ヲ促シタ。

勿論ソヴエート政權カ蓄積ノタメニ行ツテキル「没收」ト云フ言葉ノ

社會的意義ハ私營ノ資本主義經濟ノ諸狀態下ニ於ケルト全然異ナリ、蓄
積ハ搾取階級ノ利益ノタメニ行ハレテキナイ。然シナラ、強制、私
有財産ノ直接沒收、強制的プロレタリア化、餘剩生産品率ノ高イコト、
重税、低イ賃金、勞働強化、インフレーション等ハソヴエート國カ強
大ニ基礎建設遂行上下ツテ居ル手段テアル。ボリシエビエー的「社會主
義」國家ニ於テモ物資ノ生産力ノ發展ハ生キタ生産者タル勞働者ト農民
ヲ輕視スルコトニヨツテ遂行サレテキル。ソヴエート國カニ於テハ獨
家經濟ト其ノ基礎資本ノ莫大ニ發達ハ建設サルル工場ノ形式的主人タル
廣汎ノ國民大衆ノ饑饉ト貧困化ト伴フト云フ特殊狀態カ發生シタ。然レ
テソヴエートロシヤカ現在及將來ニ亘ツテ貨幣經濟ヲ維持スル以上商品
カ邊ニ市場ニ表ハルル時此等商品ニ對シテ支拂能力アル需要者カアルテ
アラウカト云フ問題カ當然發生スル。工業投資ノ「普通的方法」カヤカ

17

テ停止サルルテアラウトコロノ徴候カ多数存シテ居ル。消費ノ制限ハ局
限ニ達シタ。農民キプロレタリアートモ半飢餓及飢餓ノ状態ニ備カレ
ニ至ツタ。「善キ未來ニ對スル信用」期間カ終末ニ近ク是條カ益々倍加
シテキル。

以
上

E-0287

0016

海外經濟事情
昭和八年六月二十六日
第...年...第25號

E. 2. 0. 4 - R 1

歐米局
公第一三號

昭和八年二月十日

外務大臣伯爵 内田康哉殿
CDB

「ソ」聯邦國民經濟ノ大勢ニ關スル件

各年第四期ニ於ケル「ソ」聯邦國民經濟ノ大勢ニ關スル謄書別紙ノ通
リ茲ニ送付申進ス

在オデツサ

領事 田中文一



第一號

録件名
各年財政經濟(南)及金融
昭和八年六月二十六日
附屬書

BI

接受記

E-0287

0017

正

昭和八年二月

「ソ」聯邦國民經濟ノ大勢

一九三二年第四期及全年概績

在オデッサ日本領事館

在オデッサ日本領事館

「ソ」聯邦國民經濟ノ大勢

目次

第四期ノ大勢

總説

第一 工業生産

一 石炭

二 石油

三 製鐵

四 有色金屬

五 機械製造工業

一頁

八

一

一

一

二

一

在オデッサ日本領事館

E-0287

0018

イ 電気工業	一	自動車及「トラクター」	二四
六 林業			
七 軽工業	二六		
八 日用品ノ製造	二九		
九 食品工業	三一		
一〇 産業組合助成手段	三二		
一一 電化	三四		
第二 農業			
一 秋蒔成績	三七		
二 犁起	三九		
三 個人農家ニ對スル一時稅ノ徵收	四〇		

在オデッサ日本領事館

四 穀物増收政策	四三
第三 鐵道運輸	四五
第四 供給	四七
一 農産物買上ノ狀況	四七
(一) 穀物買上	
「ウクライナ」	
「北高架索地方」	
「セルノソフホズ」	
ノ不成績	
其他部門	
「穀物ノ外國輸出」	四七
(二) 馬齡薯	六三
(三) 種油作物	六六
(四) 棉花	六八
(五) 麻類	七一
(六) 甜菜	七四

在オデッサ日本領事館

E-0287



二、農産物及畜産物ノ政府買上法ノ改正	八一
(一) 肉	
(二) 「バター」牛乳及「チーズ」	
(三) 穀物	
三、商業	九三
四、労働者ニ對スル供給制度ノ變更	九四
第五 労働	一〇〇
一、行政經濟機關ノ機構縮少職員整理	一〇〇
二、軍人ニ對スル増俸	一〇四
三、無斷缺勤者嚴罰	一〇七
四、勞銀	一一〇
第六 財務	一一三

在オデッサ日本領事館

一九三二年國民經濟豫定計畫ノ概績

第一 工業	一一八
一、工業生産ノ概況	一一八
二、建設	一二三
(一) 炭坑	
(二) 製鐵業	
(三) 其他	
三、燃料ノ「バランス」	一三七
四、産業組合ノ生産	一三九
第二 農業	一四二
第三 運輸	一四八
一、鐵道	一四八

在オデッサ日本領事館

二 河川運輸
 三 海運
 第四 供給勞働其他

一五三
 一五六
 一五八

(以上)

在オデッサ日本領事館

「ソ」聯邦國民經濟ノ大勢

一九三二年第四期

總說

本第四期ハ農村ニ於テハ農産物ノ收穫並ニ政府買上等農業ノ總勘定
 ツナスヘキ季節ニ當レル處收穫ハ前期大體ヲ終リタルモ本期ニ持越
 シ尙降雪期ニ列入ツナサル、モノアリ最モ重要ナル穀物ノ買上ニ付
 テハ農民ノ穀物納入カ前第三期中モ前年ニ比シ溢滞勝ナリシ處十月

在オデッサ日本領事館

ニ入り更ニ其度ヲ甚タシクシタルヲ以テ當局ハ黨員青年團員ヲ督勵
シテ之カ振作ヲ圖リタルモ其効果少ナク十一月ニハ穀物陰匿者盜用
者ノ多數ヲ銃殺其他ノ重刑ニ處シ納入義務ヲ完了セサル地方ニハ物
資ノ供給ヲ減スル外アル地方ニハ馬齡暮、肉等ノ賣買ヲ禁シ陰匿物
暴露ノ非常手段其他總ユル手段ヲ講シ又一方當局ノ責任者ヲ處分ス
ルニ至レリ然モ穀物納入義務ヲ怠ルモノハ農民ノミニ非ス國營農場
ニシテ穀物耕作ヲ専門トスル「ゼルノソフホズ」ハ作付及收穫ノ不
成績ニ次テ逕回穀物ノ納入引渡ニモ豫定ノ計畫ヲ遂行セス十二月十
五日ノ完了期ニ右義務ヲ完了セルモノハ全國二百二十四ノ農場中一
モ無キ状態ナリ而シテ年末迄ニ義務ヲ遂行セルモノハ二十三地方ノ
中九地方ニシテ「ウクライナ」北高架索地方等南露主要農耕地地方ハ

在オデッサ日本帝國領事館

2

他地方ニ比シ甚タシク遅レ就中全國穀物納入量ノ三二%餘ヲ占ムル
「ウクライナ」ハ最モ不成績ニシテ一月十五日完納期ナルニ年末迄
ニ約七五%ヲ遂行シタルノミナリ
穀物以外ノ農産物ニ付テモ納入成績ハ主タル注意努力カ穀物ニ向ケ
テ居ルヲ以テ穀物程ニ懸カレサルモ穀物ヨリモ好カラス馬齡暮ノ
如キ其最タルモノナリ工業原料作物ニシテモ思ハシカラス製糖原料
ハ豫定ノ半分ニ過キス
食料品及原料タルヘキ農産物ノ調達カ右ノ如ク順調ニ進捗セス之カ
爲メニ人民ニ對スル供給モ改善セサルカ如キ状態ハ工業生産ニモ大
影響ヲ及ホセルコト勿論ニシテ燃料製鐵等ノ基本工業ノ生産ハ内ニ
ハ毎月増産セルモノアルモ依然豫定ニ達セス農作物ヲ原料トスル輕

在オデッサ日本帝國領事館

3

工業、食品工業等ノ季節物ハ前期ニ比シ増産セルモ前年同期ニ比シ増産ナク期末ニハ原料燃料不足及財政上其他ノ原因ニテ休業及操短ヲナセル工場多數ニ上リ工業本期生産高ハ前年同期ニ比シ二割餘ノ減退ナリ

鐵道運輸ハ輸送貨物數量前年同期ヨリ減少シ穀物ノ外國輸出モ前年ノ四分ノ一ニ止マリ其價格ハ六分ノ一トナレリ

財務ハ強制力ヲ以テ徵收スル分ハ豫定以上ニ收納アリタルモ貯金局預金其他任意的納金ハ「ブラン」ノ半ヲ過クル僅少ナリ

物資缺乏物價暴騰ニ對シ政府ハ十一月軍人ノ俸給ヲ増シタルカ行政經濟機關ニ對シテハ例年此ノ時期ニ慣行セラレタルヨリ一層甚タシク職員ノ整理、機關ノ廢止ヲ斷行シ勞銀ノ引上ヲ嚴重取締リ又勞務

在オデッサ日本帝國領事館

者ノ勞務規律ヲ嚴ニシ一日ノ缺勤モ免職ノ上住宅及食品供給上ノ特典ヲ剝奪シ一方勞働者ノ能率ヲ上クルト共ニ他方必要ノ供給ヲ節約セントセリ而シテ勞働者ニ對スル供給ハ消費組合ノ手ヨリ工場ノ直接管理ニ移シ尙人民ノ都市集合ヲ阻止シ無旅券者及無職業者並ニ失業者ヲ村落ニ復歸セシメ又ハ必要ノ地方ニ移住セシメ都市供給ヲ便ニスル等ノ目的ニテ帝政時代ノ如キ旅券制度ヲ復活シ「ゲベウ」ノ一機關ノ管轄ニテ一九三三年ヨリ大都市ヨリ實施スルコト、セリ

農業政策上ノ重要ナル改正トシテハ從來ノ特約ニ依ル農産物畜産物ノ買上ノ成績不良ニ鑑ミ此方法ヲ廢止シテ租稅同様ニ作付反別及所有家畜數ニ對シ一定率ノ農産及畜産物ヲ政府ノ定ムル廉價ナル價格ヲ以テ義務的ニ納入セシメ之ヲ怠ルモノハ納入過怠量ニ對シ市價ヲ

在オデッサ日本帝國領事館

以テ計算セル額ノ罰金ヲ課スル等ノ制裁ヲ定メ肉ニ付テハ本期ヨリ牛乳及穀物ニ付テハ一九三三年ヨリ實施スルコト、シ從來ノ實際上ハ兎モ角形式ハ自由ナル契約賣買ニ依ル方法ハ茲ニ峻嚴ナル強制法ニ變更セラレタリ

尙十一月ヨリ外國外交官、領事官及露國雇傭外國人及ヒ亡命外國政治犯人以外ノ外國人ニ對スル食料品日用品等供給上ノ便宜供與ハ實際慣習及禮讓ヲ無視シテ之ヲ停止シ之等ノ外國人ヲシテ供給上從來ノ特權的狀態ヨリ無組織市民ト同様ノ最惡ナル状態ニ陥レタリ右ハ從來ノ體裁ヲ棄テ供給ノ困難ヲ外國人ニ暴露セサルヲ餘義ナクセラレタルモノナリトモ看得ルモノナリ

在オデッサ日本帝國領事館

6

漸次シ纏リタルモノハ見サルニ至レリ右ハ各企業及機關ノ專業カ收支償ハス混亂ヲ來シ實際調査困難ニナルト斯ル状態ヲ公示スルヲ避クル政治的理由ニ依ルモノナルヘシ

斯クシテ「ソ」聯邦ノ國民經濟ハ幾多ノ大ナル缺陷ト暗影トヲ具シテ本年ヲ過シタリ

在オデッサ日本帝國領事館

7

第一 工業生産

工業生産ノ尺度トシテ國營工業總生産高ニ關スル國民經濟調査中央
廳ノ統計ニ依ルニ九月及一月以降九月迄ノ狀態ハ左ノ如シ（九月份
ハ右發表統計ノ累計ニ付從來發表セラレタル計數ニ依リ算出セリ）
（單位百萬留）

在オデッサ日本帝國領事館

	九月	對前月%	對前年%	一月以降累計	對前年同期%
A 類	1,333,810	106.3	106.7	12,205,712	120.2
B 類	1,184,313	135.1	95.6	9,243,910	104.9
四部所管計	2,518,123	118.1	101.2	21,449,621	113.1
重工業部	1,200,910	107.1	109.0	10,381,112	123.0
林業部	116,619	96.1	、	1,636,610	74
輕工業部	666,311	154	、	6,022,410	71
供給部	534,317	70.8	98.2	3,409,510	78

本期ノ工業生産ニ關シ右様ノ統計ナキ處「ゴスプラン」及國民經濟
調査中央廳共同ノ發表ニ係ル一九三二年ノ大工業ニ關スル統計中重

在オデッサ日本帝國領事館

工業總生産高ハ百三十二億留ナルカ之ヲ重工業部所管ト見做ストキ
 ハ第四期ノ重工業生産高ハ三十八億二千萬留ニシテ前年同期ノ三十
 六億留ニ比シ二割餘ノ減少ナリ
 國營工業總生産高ハ大體ニ於テ十月ハ前月程度ニテ中ニハ増産セル
 モノアルモ十一月ハ十月ヨリ六%減（但シ一日平均生産額ハ四%減
 ナリ）十二月ハ年末ニテ努力モアリ且例年ノ如ク統計ノ編成方法ニ
 依リ増産ヲ示セリ
 重工業中採炭、製鋼、有色金屬、機械製造等ハ本期毎月共漸増シ石
 油ノ採收及鉄鐵ハ漸減ノ趨勢ニ在リタリ
 林業ハ依然不振、輕工業及食品工業等ノ季節物ハ生産ヲ増シタリ
 前年同期トノ比較ニ付テハ一般ニ増加セルコトハ事實ナルモ其増加

在オデッサ日本帝國領事館

ノ率ハ漸次減退シ十一月ノ採炭及本期三ヶ月ノ採油量ノ如キ前年同
 期ヨリ絶對ニ少量ナリ

石 炭

九月増加ノ傾向ヲ示シタル採炭ハ第四期ニ入り毎月向上シ十二月ニ
 ハ五百七十三萬五千噸ニ達シタルカ遂ニ三月ノ高ニハ及ハサリキ各
 月採炭高左ノ如シ（單位千噸）

十月	採炭高	一日平均	對ブ ン%	對前 年 同期%
五〇九九六	一六四九	八九一	一〇〇、九	

在オデッサ日本帝國領事館

十一月	四七九三、四	一七〇、六		九八七
十二月	五七三、五〇	一八五、〇		
第四期計	一五六二八、〇	一		
一月以降累計	六二四二八、〇	一	六九四	一一〇、〇
<p>第四期合計採炭高ハ第三期ニ比シ百七十四萬噸増加セリ然レトモ各月ノ採炭高ノ前年同期ニ對スル増率ハ三月以降逐月減退セリ</p> <p>△ 「ドンバス」ノ採炭狀況</p> <p>「ドンバス」(北高架索ヲ含ム)ノ採炭高ハ左ノ如シ(單位千噸)</p>				
十月	採炭高	一日平均	對ブラ ン%	對前年 同期%
	三、五六七、七	一二〇、〇	九〇、〇	九一、〇

在オデッサ日本帝國領事館

十一月	三、三三五、八	一一八、八	、	八八四
十二月	四〇三、四〇	一三〇、一	八九〇	、
第四期計	一〇、九三七、五	一		、
一月以降累計	四三、九八七、五	一	七八六	一〇八、〇
<p>「ドンバス」第四期採炭高ハ第三期ニ比シ百四十六萬噸約一割五分増加セルカ「プラン」ノ九割ニ及ハス而モ前年同期ヨリ一割方ノ減少ナリ</p> <p>其他ノ炭坑ニ至リテハ「ドンバス」ヨリ幾分不成績ニシテ殊ニ「ウラル」方面不良、同地方工場中ニハ燃料炭ノ供給所要量ノ三分ノ一ナルモノアリ爲メニ作業休止ヲ餘儀ナクセラレタルモノアリト</p>				

在オデッサ日本帝國領事館

石油

探油量ハ十月ニ入り少シク増加セルモ十一月ニハ休日其他ノ關係ニテ復減少セリ
 本期各月ノ探油量ヲ示セハ左ノ如シ(單位千噸)

全 聯 邦	アズネフチ		グロズネフチ	
	採油量	%	採油量	%
十月	一、七〇三、一八三、〇	九七〇、〇七四、一六一、八七九、四〇	九四五、〇八八、五	
十一月				

在オデッサ日本帝國領事館

十二月	十一月	十月	九月	八月	七月
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月
二、三〇〇、〇〇〇	一、八一〇、〇〇〇	一、三三〇、〇〇〇	一、〇七八、八	四九〇、六七三、四	

探油量ニ關スル資料不足ニテ相當ノ觀察ヲナシ得サルカ十月ノ探油量ハ前年同月ノ百九十八萬七千六百噸ニ比シ二十六萬六千噸即チ一六%餘ノ減少ニシテ一月以降十ヶ月ノ累計ハ千八百二十七萬三千噸「ブラン」ノ八五八%ニシテ前年同期ニ比シ一%ノ減少ナリ
 石油ノ再製高ハ十ヶ月累計千七百二十二萬九千噸ニシテ前年同期ニ比シ五三%ヲ増加セリ

在オデッサ日本帝國領事館



三、製 鐵

第四期ニ於ケル製鐵業績ニ付テハ銑鐵ハ九月ノ増産傾向ヲ十月モ持
續セルカ十一月ヨリ復々減退シ鋼ハ九月ヨリ十二月迄逐月増加ヲ示
シ第三期生産高ニ比シ銑鐵ハ六四%、鋼ハ八九%ヲ増加セリ
本期各月ノ生産高ハ左ノ如シ

● 銑 鐵

第三期計	生産高 (千噸)	一日平均 (噸)	對 前 年 同 期 %
一、五六六三	、	、	一、二九二

在オデッサ日本帝國領事館

● 鋼

十月	五七五一	一八五〇〇	、	一、二九四
十一月	五四〇二	一七八八七	、	一、二〇〇
十二月	五五一、一	一七七五二	、	、
第四期計	一、六六六四	、	、	、
一月以降累計	六二一三一	、	六九〇	一、二七七
● 鋼				
第三期計	一、三五一、五	、	、	一、〇六六
十月	四七五一	一五二八二	、	一、〇〇九
十一月	四八六三	一六三二〇	、	一、〇四〇
十二月	五一〇、九	一六六八六	、	、
第四期計	一、四七二、三	、	、	、

在オデッサ日本帝國領事館

一月以降累計 五八七五五		、 、 、		六、八		一〇七五	
製鐵業中ノ大合同タル「スタリ」及「ドネプロスタリ」ノ生産成績 左ノ如シ（單位順）							
・鉄 鐵				ス タ リ		ドネプロスタリ	
	生産高	對 ン %		生産高	對 ン %		
十月	二三七八八七	九五五		一二〇、九四八	九六		
十一月	二二〇、六七五	八八八		一二〇、〇七七	九〇		
十二月	二二〇、四六七	八八四		一二〇、三八四	九〇		
第四期計	六七九〇二九	、 、 、		三六一、四〇九	、 、 、		

在オデッサ日本帝國領事館

一月以降累計 三、七五三、二二六		對一九三一年%		、 、 、		、 、 、	
・鋼							
	生産高	對 ン %		生産高	對 ン %		
十月	一五〇、九〇〇	八四九		八三、二一〇	七六〇		
十一月	一五六、八六一	八一、一		一一〇、五五七一	九一、〇		
十二月	一六四、九六四	八二、九		一〇九、六二六	九一、〇		
第四期計	四七二、七二五	、 、 、		二五九、八四〇七	、 、 、		
一月以降累計	一九八、九〇三八	、 、 、		、 、 、	、 、 、		
對一九三一年%	一〇八、四	、 、 、		、 、 、	、 、 、		

歴延鋼材ハ十月中九月ヨリ増産アリ一月外降十ヶ月累計生産高三百五十萬六千百噸ニシテ前年同期ニ比シ一〇、六%ノ増産ナリ

在オデッサ日本帝國領事館

尙合同「スタリ」ノ一九三二年全年壓延鋼材製出高ハ百五十三萬九千七百噸ニシテ前年ノ百四十四萬五千六百噸ニ比シ六五%増ナリ

四 有色金屬

本期各種有色金屬ノ生産高左ノ如シ

	十月	十一月	十二月	計
粗銅	三、四八七	三、三七六	四、二八七	一一、一五〇
鉛	一、九七六	一、〇四九	二、三七四	五、五三九
亞鉛	一、三七一	一、二七八	一、四一七	四、〇六六
アルミニウム	一、三二二	一、二二二	一、四二二	三、九六六

在オデッサ日本帝國領事館

五 機械製造工業

(イ) 電氣工業

合同「B90」所屬各工場ノ總生産高ハ

十月	六〇、五八四千留	對ブラン	一一六〇%
十一月	五九、九一三千留	對ブラン	一〇八九%

ニシテ本年十一月累計額ハ前年同期ニ比シ三二%増加ナリ

在オデッサ日本帝國領事館

ロ 自動車及「トラクター」

第四期ノ重ナル工場ニ於ケル自動車及「トラクター」ノ製造高左ノ如シ（新聞「ブラウダ」所報ニ依ル）

●自動車

	アモ工場	ニイジゴロド工場	計
十月	一、七二〇	一、〇八九	二、八〇九
十一月	一、六一〇	一、〇一三	二、六二三
十二月	一、八六二	△一、五六〇	三、四二二
第四期計	五、一九二	三、六六二	八、八五四
一月以降累計	一、五一四八	七、七五二	二、三九〇〇

在オデッサ日本帝國領事館

●トラクター

	ハリコフ工場	スタリン工場	計
十月	一、八二〇	二、六三二	四、四五二
十一月	七七〇	二、四三二	三、二〇二
十二月	一、七六〇	三、〇〇一	四、七六一
第四期計	四、三五〇	八、〇六五	一二、四一五
一月以降累計	一、六六九〇	二、八八〇五	四、五四九五

△「ニイジゴロド」工場（新名「ゴリキイ」工場）ハ十二月新ニ乗用車二十五輛ヲ製出セリ

自動車ハ右二工場ニ於テ第四期ハ第三期ヨリ二千三百五十輛ヲ増セリ

在オデッサ日本帝國領事館

「トククター」ハ「ハリコフ」工場ニ於テ十一月中機械破損修繕ノ爲メ減産ナリシカ第四期右兩工場ノ製出高ハ第三期ニ比シ千七百三十七輛ヲ増加セリ

六 林 業

木材ノ秋冬伐採期ハ十月一日開始セルカ林業部所管林業ノ第四期「プラン」三千五百八十萬立方メートルハ十二月一日迄ニ三三・二%ヲ實行セルノミニシテ「トラスト」「ウラルレス」ノ如キ「ウラル」地方全部ノ半分、全聯邦ノ八%以上ヲ伐採スヘキ管ノ處十一月二十日迄ニ

在オデッサ日本帝國領事館

第四期「プラン」ノ九一%ヲ實行シタルノミナリ

右不成績ノ原因ハ労働者ノ不足主タルモノニシテ所要人數四十七萬八千四百人ニ對シ十一月二十日現在員十八萬二千七百人ニシテ而其出入移動極メテ頻繁ナルニ在リト

木材ノ搬出ハ第四期「プラン」二千四十四萬八千立方メートルニ對シ十二月一日迄ニ二六%ヲ實行セルノミ右ハ運送ニ要スル馬匹ノ不足ニ歸因スト

△ 製紙業

國內ノ製紙ニ對スル需要カ益々増加シ本年中四工場ノ完成セルニ不拘生産之ニ應セス製紙ハ依然不足セル處本年九ヶ月間ノ製紙高ハ一

在オデッサ日本帝國領事館

「ブラン」ヨリ不足スルコト十四萬一千噸ニシテ一九三一年同期ニ比シ一萬四千噸減少セリ
 十月ニ於ケル全國製紙業績ハ月「ブラン」ニ對シ新聞用紙八五九%
 印刷料紙七八二%、筆記用紙四〇六%ナリ

セ 輕工業

輕工業部所管工業ノ生産高ハ本年三期間九ヶ月ニ六億二千二百四十萬留ニシテ前年同期ノ夫ニ比シ七一%ノ増産ナリ
 同工業中右九ヶ月間ニ前年同期ニ比シ増産セルモノハ綿業ノ一五五

在オデッサ日本帝國領事館

%、絹業ノ一九七%、「メリヤス」業ノ二五九%、模造皮ノ一七六%、石鹼製造ノ三五%ナルカ毛織物及製靴ハ減少シタリ
 而シテ豫定計畫ノ實行率ハ八七%ニシテ内毛織物ハ六九%、製靴ハ六一%ナリ
 第四期輕工業生産「ブラン」ハ一日平均高ヲ第三期ニ比シ左ノ如ク擴大セリ

	單位	第三期	第四期
綿 布	百萬米	五四〇	七七六五
製 靴	百萬足	一六七	二三八
靴 下	同	三一五	五一五

然ルニ十月以降ノ実績ハ九月ニ比シ著シク改善セルカ其「ブラン」

在オデッサ日本帝國領事館

五對スル實行率ハ未タ缺陷アリ輕工業部所管工業ニ付テハ十月八五
 四%、十一月八〇、八%、十二月ハ不明ナルモ八割見當ナリトス其種
 類別左ノ如シ

種類	單位	十月		十一月		十二月	
		數量	%	數量	%	數量	%
綿布	百萬米	二一八五	八七五	二一三〇	八〇七	二一七一	八三二
毛織物	萬	八五六		七七七		九七九	九二
製靴	百萬足	六四二	八五七	六八		七三八	五二
靴下	萬					一四五	八〇、五
メリヤス	千枚					一五三一	八六〇
肌衣	千枚					七三五	九八一
セーター	萬					六二二	七〇、四
熨斗	千箱			四七一			

在オデッサ日本帝國領事館

輕工業原料ノ濫用ハ依然盛ニシテ「イズウエスチヤ」(十二月六日
)所報ニ依レハ本年九ヶ月間ノ成績ニ依ルニ一定ノ限度ヲ超過セル
 コト綿業ハ五%、毛織物ニ七%、陶器七%、磁器一%、熨斗用鹽
 酸加量一、二、五%、製靴用皮革ハ上半期間ニ六百十噸即チ五百萬足分
 ニ達スト

八 日用品ノ製造

本夏以來増産ヲ圖リタル日用品ノ製造ハ益々其必要ニ迫ラレ居ルモ
 著シキ發展ナキ處就中重工業部所管工業ニ於ケル日用品生産高ノ比

在オデッサ日本帝國領事館

重ハ其管轄種類ニ依リ差違アリ一〇一ニ一ノ間ニアルカ其生産高
十月ハ前月ニ比シ一六%増加セルモ第四期「プラン」ハ種類ニ依リ
一三%乃至五八%平均二五五%ヲ遂行シタリ而シテ同月中ノ製品發
送ハ豫定通りニ行ハレス其率ハ製造ノ率ヨリ低シ
右ノ如ク十月ノ製造成績不良ニ鑑ミ重工業部參與會ハ之カ對策トシ
テ(一)本部内各廳ニ本件責任者ヲ置キ地方各共和國重工業部代表處ニ
其科(セクトル)ヲ、地方州同部代表附ノ責任指導者ヲ置キ(二)品質
改良ノ爲メ日用品品質部ヲ中央及地方機關ニ設ケ(三)尙十二月ヨリ職
工ノ個人及團體ノ競技術度ヲ設クヘキコト等ヲ決定スル處アリタリ
第四期ノ重工業部所管ノ日用品製造ハ第三期比シ一七六%増加セルヲ
林業部所管工業ノ木製日用品ハ十月ハ「プラン」ノ七一%ニ製
造
シタリ

在オデッサ日本帝國領事館

30

九 食品工業

食品工業中重ナルモノニ付テハ罐詰製造高ハ十月ハ昨年同月ニ比シ
一七五%増ナルモ同月「プラン」ハ八五七%ヲ實行シタリ就中肉類
罐詰ハ五四%、魚類ハ六三%ナリ右生産未能ノ原因ハ主トシテ原
料ノ供給不足ニ在リ

製糖ハ十月末迄ニ作業開始セル工場ハ百八十一ノ内六十五ニシテ同
日迄ノ本季新物製糖高六十萬噸ノ豫定ニ對シ二十四萬二千四百噸ナ
リ

在オデッサ日本帝國領事館

31

一〇、産業組合助成手段

(一) 手工業者課税軽減

聯邦中央執行委員會及内閣ハ十月二十七日付ヲ以テ手工業助成ノ爲メ手工業者ニ對スル課税ヲ軽減スルコト、セルカ其重ナル點左ノ如ク
一、 自宅ニ於テ仕事スル「コオペラチーフ」手工業者ハ其製品ヲ組合ニ納入シテ得ル所得ニ對スル所得税課税上ニ於テハ労働者及勤

在オデッサ日本帝國領事館

務者ニ準ス

二、 雇人ヲ使用セサル組合員ナラサル手工業者ノ所得税ハ別ニ定額ヲ定メ右ニ對シテハ營業税ヲ免ス
三、 手工業者ニシテ一兩人ノ雇人ヲ使用スル者ニ對シテハ所得税ハ定額ニ依リ三人以上ヲ使用スル者ニ對シテハ取扱高ノ歩合ニ依リ課税ス
四、 手工業者ニシテ農業税ノ賦課ヲ受クルモノハ一九三二年五月四日ノ税法規定ノ率ヨリ半減シテ二〇・三〇%トス
右ハ明年ヨリ實施ス

(二) 産業組合ニ對スル家賃ノ引下

在オデッサ日本帝國領事館

内閣ハ十月二十三日付決定ヲ以テ産業組合及手工業者ノ借家補助ノ爲メ(一)産業組合ニ貸與スル家屋借料ハ現在額ヨリ二割以上ヲ引下クル旨及(二)手工業者ニ貸與スル工場ハ今後一年以上移轉シ又ハ料金ヲ引上クルコトヲ禁スル旨ヲ公布セリ

一、電 化

「グラブエネルゴ」所屬各發電所ノ發電量左ノ如シ(單位百萬「キロワット」時)

在オデッサ日本帝國領事館

月	發電量	對月アラ ン%	對前年 同期%
一月	六七五五		
八月	六〇二一		
九月	六四五二	七〇、九	
十月	七二九四	七三、六	一二五、五
十一月	七五六〇		
十一月月累計	七二〇一〇		一三五、九

發電量ハ右ノ如ク八月以來毎月漸増セルカ豫定計畫ニ對シ格段ノ不足アル處其原因ハ(一)工場建築未完ノ爲メ需要者側ノ實際使用高ハ申込量ヨリ少ナク例ヘハ其率ハ一月ノ一、二%、五月ノ一〇、四%ヨリ九月ニハ二四、六%ニ昇騰セルカ如キ(二)發電機械類ノ破損頻繁ナル等ナ

在オデッサ日本帝國領事館

電氣業ノ經營モ良好ナラス燃料ノ濫費甚タシク十ヶ月間ニテ十一萬九千噸ノ各種燃料ヲ所定以外ニ超過キタリト
發電力ハ十月末現在二百四十九萬七千「キロワット」ニ達シ前年同期ニ比シ四六%増加セリ

在オデッサ日本帝國領事館

36

第二 農業

一、秋蒔成績

「タス」所報ニ依レハ秋蒔作物ノ播種反別ハ十一月二十日現在左ノ如シ

千ヘクタール 對ブラン%

在オデッサ日本帝國領事館

37

E-0287

0039

全 聯 邦 三六七二九 八九八
 ウクライナ(十一月十日) 一〇一二九六 九五六
 北高架索 三、二七九 七四七
 右ノ外全聯邦ニテ向日糞十六萬二千「ヘクタール」、黍一萬八千「ヘクタール」、家畜用球根二萬三千「ヘクタール」、野菜四千二百「ヘクタール」、「マホルカ」千三百「ヘクタール」計二十萬八千五百「ヘクタール」アリ
 全聯邦秋蒔作物ノ作付反別ハ十一月十日現在三千六百三十六萬八千「ヘクタール」「プラン」ノ八八七%ナルカ之ヲ前年同期ノ三千七百四十萬三千「ヘクタール」「プラン」ノ八七%ニ比スレハ「プラン」實行率ハ高キモ播種地積ハ三、八%ノ減少ニシテ一九三〇年ヨリ約一

在オデッサ日本帝國領事館

割ノ減少ナリ而シテ「ウクライナ」ニ於ケル十一月十日現在ノ作付面積ハ昨年ニ比シ九四%ニシテ昨年ヨリ減少セリ
 三 犁 起
 來春播種準備トシテノ犁起狀況ハ農務部發表ニ依レハ十二月二十日現在左ノ如シ
 千ヘクタール 對プラン%
 全 聯 邦 二四四七四 五六九
 内 ウクライナ 三一八

在オデッサ日本帝國領事館

北高架索

三〇三

中央黒土地方

九七一

カザクスタン（最低）

一九九

右農事ニ於テモ「ウクライナ」ハ成績不良ニシテ同共和國穀物「ソ
フホス」ハ此方面ニモ不成績ヲ示シ十一月三十日迄ニ農場ニ依リテ
ハ豫定ノ二%乃至五〇%ニシテ全體ニテ三十二萬五千「ヘクタール」
即チ一七%ナリ

三、個人農家ニ對スル一時税ノ徵收

在オデッサ日本帝國領事館

聯邦中央執行委員會及内閣ハ十一月十八日付決定ヲ以テ本件新税ヲ
設定セルカ右ニ依レハ

一、「コルホス」員、貧窮者、有勳者、特殊軍人以外ノ農民ハ本税
納付ノ義務ヲ負ヒ

二、税率ハ三種ニ分チ

イ 農業税ヲ定額ニ依リテ賦課セラル、モノ即チ收入ノ少キモノ
ハ十五留乃至二十留

ロ 遞増率ニ依リ農業税ノ賦課ヲ受クルモノハ三二年度ノ右税額
ノ一〇〇—一七五%、最低二十五留ヲ降ラサルモノトス

ハ 「クタク」ハ本年度農業税ノ二倍

三、納期ハ本年末迄ニシテ實施期ハ十一月二十一日トス

在オデッサ日本帝國領事館

四 本稅收入ハ七五%ハ國家豫算ニ、一〇%ハ地方(州)ニ、一五%ハ「ライオン」ノ收入ニ繰入ル等ナリ

本稅設定ノ理由ニ付テハ(一)租稅殊ニ村落ニ於テ徵收スルモノカ不成績ニシテ租稅收入ノ不足ヲ補ハントスルモノナルコトハ勿論ナルカ(二)最近農民殊ニ個人農家カ租稅公課ノ納入及農產物ノ政府賣上義務並ニ農事計畫ヲ實行セサルモノ益々甚タシキニ至レル結果之カ對策トシテノ意味ナルロト明カナリ

在オデッサ日本帝國領事館

42

四 穀物增收政策

政府及黨本部ハ農ニ九月二十九日付決定ヲ以テ收穫率向上ノ方策ヲ定メ工業原料作物ノ作付地擴張ヲ中止シ穀物作付地ヲ増スコト、セリルカ今般十二月十七日付内閣決定ヲ以テ穀類及向日葵ノ收穫率及總收穫高ヲ決定スル爲メ内閣ニ常設ノ本委員會ヲ設置スルコト、セリ而シテ右官制ニ依レハ全國ニ二百八十乃至三百ノ地方委員會ヲ設ケ委員長ハ常任ニシテ内閣ニ於テ任命シ委員ハ農務及農產物買上機關ノ職員ヨリ選任シ之ニ國民經濟調査中央廳ノ代表ヲ加ヘタルモノト

在オデッサ日本帝國領事館

43

シ右地方委員會ノ常務指導及統一ノ爲メ中央委員會代表ヲ共和國、
地方及州ニ遣クコト、セリ

在オデッサ日本帝國領事館

第三 鐵道運輸

本期鐵道運輸ノ狀況ヲ貨物一日平均積出貨車數ニ依テ見ルニ十月ハ
九月ヨリ増加セルモ十一月ヨリ復々下降セルカ其數左ノ如シ

月	貨車數	對ブラン%	對前年同月%
九月	五二、一七四	八三、六	九一、一
十月	五三、四五〇	八六、〇	九五、三

在オデッサ日本帝國領事館

十一月

五〇〇九八

八三一

九〇四

十二月

△四九五五〇

八二六

九九八

△十二月分ハ初十二日分ノ平均數ナリ

輸送貨物中十月分ニ付テ見ルニ穀物ハ豫定ノ六二%、石油ハ七八%
石炭ハ八九%、鑛石ハ九三%等ナリ

列車運轉方面ハ「プラン」通りニハ至ラサルモ前年ヨリハ幾分改善
發達セリ

在オデッサ日本帝國領事館

第四 供給

一、農産物買上ノ狀況

(一) 穀物買上

穀物買上事業ハ食料缺乏ノ現下最大緊要問題ニシテ當局ハ七月本事業開始以來全力ヲ盡シテ豫定計畫ノ遂行ニ奔走シ居リ「ウクライナ」ハ重要農耕地ニシテ本事業ニ決定的役目ヲ有スルモノナルカ其成

在オデッサ日本帝國領事館

續不良ナルヲ以テ地方諸新聞モ其大半ヲ本件ニ關スル記事ニ割キタル程ナリ

本年ノ穀物買上豫定高ハ「コルホズ」商業其他ノ關係ニテ昨年ヨリ減少シ總高二千五十五萬噸餘トシ一月十五日迄ニ完納スルコト、セムカ農民ノ納入遅レ買付開始以來豫定通りニ進捗セス十月一日迄ニ其三七一%ヲ收納セリ之ヲ前年同期ノ四三%ナル成績ニ比スレハ可ナリ遲レタリ

其後本期ニ入りテモ事業好轉セス十月ハ同月「ブラン」ノ五六%ヲ實行セルノミニシテ成績不良ニシテ當局モ纏リタル資料ヲ發表セサルニ至レルカ年末迄ニ所定ノ穀物納入義務ヲ履行セルモノハ地方別ニ見レハ「モスクワ」「タ、リヤ」「バシキリヤ」「イワノウオ

在オデッサ日本帝國領事館

ズネセンスク」「レニングラド」西部白露及「クリミヤ」ノ歐露ノ北部九地方ニシテ南露ノ主要農耕地方及「ウラル」以東ハ甚タ不成績ナリ

就中「ウタライナ」及北高架索ハ地方トシテノ納入高主位ヲ占メ居リ本年左記數量ノ納入義務ヲ負フ(單位百萬布度)

	農	民	部	ソフホズ
	一九三一年	一九三二年	一九三二年	
ウクライナ	四三四	三五六	二九〇	
北高架索	一五四	一三六	三七〇	
計	五八八	四九二	六六〇	

右ノ全買上高ニ對スル割合(%)ハ左ノ如シ

在オデッサ日本帝國領事館

農民部 ソフホズ

ウクライナ	一九三一年	一九三二年	一九三三年
	三二七	三三三	一九二
北高架索	一四二	一二三	二四五
計	四五九	四四六	四三七

此二地方ニ於ケル斯業ノ成績ノ重大ナル影響見ルヘキナリ

△ 「ウクライナ」

「ウクライナ」ニ於ケル穀物收納ノ成績ハ前年ニ比シ又他地方ニ比シ甚タシク不良ニシテ未打穀ノモノ一月一日現在三十九萬一ヘクタール分アリ黨部及當局カ熱心豫定計畫ノ遂行ニ努力セルモ其効頗ル

在オデッサ日本帝國領事館

輕少ニシテ幾多責任者ノ處分セラル、モノヲ見タルカ其買上ノ「テムボ」ハ十月一日現在年「プラン」實行率ハ三四五%ナリシカ十一月一日ニハ四〇、七%、十二月一日ニハ六三、一%、一月一日ニハ七四、五%トナレリ

社會部門別ニ見ルニ一九三三年一月一日ニ於ケル七州一自治共和國ノ年「プラン」ノ實行率ハ左ノ如シ(ウクライナ共黨機關紙所報)

	最高	最低	平均
コルホズ	一〇三、七 (キエフ)	七〇、二 (ドネツ)	七八、三
個人農家	一〇八、四 (モルダヴィヤ)	四三、六 (ハリコフ)	七一、四
農民部計	一〇〇、一 (キエフ)	六九五 (ドネツ)	七七、四
ソフホズ	一四〇、五 (モルダヴィヤ)	七七一 (ドネツ)	八六、九

在オデッサ日本帝國領事館

ガランツエ税	五四四 (モルダヴィヤ)	三三四 (ハリコフ)	三六一
計	九二五 (ウシツツ)	六八一 (ドネプロ)	七四五
ガランツエ税 以外ノ計	九九五 (ウシツツ)	七〇六 (ドネプロ)	七八四

而シテ「オデツサ」州ニ於ケル年末現在ノ成績左ノ如シ

州内五十一ライオン	州内十一ソフ ホス
對十二月 ラン%	對年プラン%
對年プラン%	對年プラン%

プラン以上ノ納入 セルモノ	五ライオン	八ライオン	ナシ
最高	一一八七	一〇五五	九一八
最低	一四五	四四二	五二九

在オデツサ日本帝國領事館

平均 三一六 七二四 七六二

即チ「オデツサ」州ハ「ウクライナ」共和國七州一自治共和國ノ平均以下ノ成績ナリ

△ 北高架索地方

北高架索ハ穀物納入ノ各月「プラン」ヲ八月ノ三二%、九月一七一%ヲ實行シ九月三十四萬六千五百噸ヲ納入セル處十月ハ同月「プラン」ノ三四%、十八萬八千六百噸ヲ納入シ十一月迄二年「プラン」ノ四二%ヲ實行セリ

而シテ社會部門別ニスレハ十月「プラン」實行ハ「ソフホズ」一〇%、九八四噸、MTCI四二%、其他ノ「ゴルホズ」四六%、個

在オデツサ日本帝國領事館

人農家一三一%、三〇、六五〇噸、富農一〇一%ナリ

十一月ハ成績更ニ下リ地方當局ハ從來一般ニ行ハレタルカ如キ強制手段ノ外若干村「ソウエト」ノ臨時改選ヲ行ヒ役員ヲ變更シ穀物除匿盗用ニ峻烈ナル防止手段ヲ行ヒ十二月後半ヨリ其効果現ハレ年末ニハ地方四十五ヶ「ライオン」ハ年「プラン」ヲ全部遂行シ「クウバン」方面十二ヶ「ライオン」ヲ残スニ至リ大體其義務ヲ完了セリ

△ 「ゼルノソホズ」ノ不成績

「ソフホズ」ハ「ソウエト」農業ノ基幹ニシテ之ニ依リ食料及原料ヲ基本的ニ保障セントスルモノニシテ穀物ノ買上ニ於テモ其役目ハ今年一層重クセラレタリ然ルニ各「ソフホズ」全部ニテ十月八月一

在オデッサ日本帝國領事館

プラン」ノ二九八%ヲ實行シ十一月一日迄二年「プラン」ノ三九五%ヲ納入セルノミニシテ前年同期ノ七九%實行ニ比スレハ非常ノ懸隔アリトス

各種「ソフホズ」ノ内穀物耕作ヲ主トスル「ゼルノソフホズ」ハ二百二十四ヶ所アリ耕地千二百萬「ヘクタール」ヲ所有シ設備完全他ニ比類ナク機械類ハ「トラクター」ノミニテモ五十七萬五千馬力ヲ有スルモノナルカ其穀物納入成績ハ不良ニシテ十二月上旬養羊豚、乳産、麻及棉花等ノ諸「ソフホズ」カ穀物納入ノ義務ヲ大體完了セルニ不拘「ゼルノソフホズ」ハ十二月十五日ノ所定完了期迄ニ納入ヲ了セルモノ一モナク收穫穀物ヲ他ニ賣却シ自用分ヲ過大ニ取得シ又ハ他ニ流用シ打穀ノ如キモ十二月一日頃ニ尙未了ノモノ六十五萬一

在オデッサ日本帝國領事館

ヘクタール分（「ウクライナ」ハ三萬「ヘクタール」）アリ此打穀ノ
ミニアモ百日餘ヲ要スル次第ナリ
穀物ノ搬出ニ付テモ「セルノソフホズ」全體ノ所有自動車六千臺ア
リ其七割ハ穀物運搬ニ從事シ得ヘキ筈ナルカ「ソフホズ」部カ六十
九ヶ「ソフホズ」ニ就キ調査セル處ニ依レハ實際運搬ニ從事シ居レ
ルモノ三五%、而モ其利用能率ハ四五%ナルカ如キ状態ニテ十二月
一日最寄「エレバトル」ニ未搬出ノモノ十二萬噸アリ之カ爲メ自動
車運轉手ニ勞銀ヲ噸秆ヲ以テ支拂フ制度ヲ設ケ其他ノ手段ヲ講シ多
少ノ改善ヲ見タルモ大體ニ於テ依然不成績ニシテ「ウクライナ」一
クリミヤ「トラスト」長ヲ手初メニ農場長其他責任者ノ免職黨籍
除名ノ上裁判ニ附シタルモノ非常ニ多ク十二月後半ヨリ一層嚴酷ニ

在オデッサ日本帝國領事館

處分ヲナスニ至レリ
「ウクライナ」ハ北高架索及西部西伯利ト同様ニ其成績不良ニシテ
模範農場トモ稱セラル、「オデツサ」州「コシオル」農場ハ年末迄
二年「プラン」ノ八九%ヲ、「ニコラエフ」農場ハ五四九%遂行
兩者トモ打穀未了ノモノアリ責任者ハ孰レモ處分ヲ受ケタリ
「セルノソフホズ」ノ業績ニ付テハ一九三一年モ其他ノ「ソフホズ」
ト共ニ經營不經濟的ニシテ國家財産即チ收穫物盜用喪失等アリシ
ヲ以テ聯邦中央執行委員會及内閣ハ十一月二十八日付決定ヲ以テ其
對策ヲ定メ責任者ヲ處分シ合同ノ議長ヲ更迭シタルコトアリ今年
ハ右措置ニ依リ其業績改善セサルノミナラス前記穀物納入ニ關スル
成績ノミニ見ルモ甚タ不良ナル状態ニ在リ早晚根本的改善策ヲ要ス

在オデッサ日本帝國領事館

ヘシ

△ 其他ノ都門

「コルホマ」ハ他ニ比シ相當ノ成績ヲ舉ケ殊ニ農業機械貸下所（MTC）ノ關係スルモノハ好キ方ナリ個人農家ハ最モ不良ノ成績ナリ穀物買上ノ不成績ノ原因ニ付テハ作柄ハ「クウバン」地方「ウクライナ」ノ一部ハ氣候關係ニテ不作アリタルカ大體ハ中ノ上ニシテ不作ト謂フヘカラス農民カ一九三一年以降ノ困難ニ依リ食料缺乏飢餓ノ前途ヲ見越シテ銃殺ノ嚴刑ヲ犯シテモ之ヲ陰匿セルコトハ事實ニシテ買付案モ過大トナリ勝ちノ作付地積、收穫率ニ關スル報告ヲ基

在オデッサ日本帝國領事館

礎トシ之ニ例ノ如ク實行不能ノ場合ヲ見越シテ附加セル分ヲ合算シテ過大ナルヘキカ農民ノ狀態及市内食糧狀態ハ未曾有ノ不良ニシテ當「ウクライナ」ニ於テ農民ノ大部分ハ十一月迄ハ南瓜ヲ主食トシ今日ハ隠シ居リタル玉蜀黍ヲ食シ居リ孰レモ麥類ノ手持及陰匿ヲ否定シ居レリ而シテ「オデッサ」市ニ於テハ州内穀物買付不良ノ結果ニヤ時ニ「バン」ノ配給遅ル、コト二日ニ及ヘルコトアリ特典ヲ有スル一部人士モ最近普通民同様ノ配給所ヨリ「バン」ノ配給ヲ受クルニ至レリ

△ 穀物ノ外國輸出

在オデッサ日本帝國領事館

穀物ノ外國輸出ハ「ソ」聯邦國民經濟ニトリ最モ重要ナルモノナル
 カ其新收穫物ノ出廻ル期間ニ依ル一年間ノ豆類ヲ含ム各種穀物輸出
 高及小麥裸麥大麥燕麥ノ四麥類ノ輸出高ハ

各種穀物	千噸		百萬留	
	千噸	百萬留	千噸	百萬留
自一九三〇年七月	五五一・三	二〇九九	五三二・六三	二〇〇・八
至一九三一年六月	四四三・六九	一三四・四	三九二・八二	一一七・〇
自一九三一年七月	四四三・六九	一三四・四	三九二・八二	一一七・〇
至一九三二年六月	四四三・六九	一三四・四	三九二・八二	一一七・〇

ニシテ各種穀物買上高ニ對シ一九三〇―三一年度ハ二六・二%、一九
 三一―二年度ハ二〇・九%ニ當ル
 本年ノ穀物買上カ以上ノ如ク不成績ナル結果穀物ノ外國輸出モ激減

在オデッサ日本帝國領事館

シ新收穫穀物ノ出廻初メノ時期七月ヨリ年末ニ至ル六ヶ月間ノ輸出
 高ヲ稅關統計ニ依リ前年同期ト比較セハ左ノ如シ

各種穀物	千噸		百萬留	
	千噸	百萬留	千噸	百萬留
一九三〇年	四〇一・三二	一六三・五	三九一・三三	一五二・七
一九三一年	三六八・三七	一一〇・二	三六四・四八	一〇四・二
一九三二年	一、〇一・〇一	三三・六	八九三・二	二七・四

本年六ヶ月間ノ各種穀物ノ輸出ハ一九三〇年同期ニ比シ數量ニ於テ
 約四分ノ一トナリ金額ハ一億三千萬留ノ減少ナリ右ハ外國貿易入超
 ノ今日對外支拂上ニ大影響ヲ與フルモノナリ
 而シテ本年六ヶ月間ノ穀物輸出高ノ買上穀物ニ對スル割合ハ買上豫

在オデッサ日本帝國領事館

定總額二千五十五萬噸ニ對シ十二月迄ノ徵收量ヲ假リニ八割トシテ
 計算セハ千六百四十四萬噸ナルニ依リ輸出ハ六%ニシテ前年及前々
 年ニ比シ非常ニ減退セリ
 又政府買上穀物ヨリ七月ヨリ翌年六月ニ至ル間ノ外國輸出穀物ヲ控
 除シテ國內ニ殘ル政府買上穀物ノ高ハ一九三〇—三一年ニ千五百三
 十七萬噸ニシテ一九三一—二年ハ千六百八十萬噸ナルカ一九三一年
 九月ヨリ一九三二年八月迄ノ一年間ニ穀物及穀粉二十一萬八千噸ヲ
 輸入シタリ前年同期ノ輸入高ハ七萬一千噸ナリ右輸入ノ内小麥十二
 萬一千噸、穀粉一萬七千噸等アリ(之等ハ加奈尓ヨリ極東へ、新疆
 及波斯ヨリノ輸入ニ係ル)
 斯ノ如キ昨年末ノ狀勢ニ見ルトキハ今後ノ國內穀物ノ供給ハ外國ヨ

在オデッサ日本帝國領事館

リノ輸入ヲ以テ補足スルニ非レハ困難ヲ加フヘシ

(二) 馬鈴薯

馬鈴薯ノ買上高ハ幾ニ本年ノ特約ニ依リ一千八十五萬二千噸ナリシ
 處「コルホズ」商業許可ニ關聯シ本一九三二年六月十四日付内閣決
 定ヲ以テ之ヲ六百九十萬噸ニ減縮セリ右重ナル地方別ノ買上計量數
 量及全聯邦ニ對スル比重左ノ如シ(單位千噸)

	當初ノ計量	百分比	改正計量	百分比
ウクライナ	三、一三二	一九六%	九二〇	一三三%
北高架索	二、八四	三六	一〇〇	一、四
中央黒土地方	一、六〇九	一四八	一、三二四	一九二

在オデッサ日本帝國領事館

モセス
モスクワ州 一、六五五 一五二 一、〇五八 一五三
右馬齡薯納入成績ハ良好ナラス十一月一日迄全聯邦ニテ四四一%、
最終發表ノ「ビユレテン」ニ依レハ十二月五日迄ノ年「プラン」實
行率左ノ如シ

全 聯 邦	七〇、三 %
ウクライナ	四一、三
北高架索	七六〇
中央黒土地方	八四六
モスクワ州	一〇六七

右ノ如ク同日ニ於ケル徵收未了ノ分ハ全國ニテ二百萬噸内「ウクラ
イナ」五十四萬噸ニシテ其後ノ買上量ハ極メテ微々タルモノナリ

在オデッサ日本帝國領事館

「ウクライナ」ニ於ケル馬齡薯納入成績ハ納入總量カ當初ノ「プラ
ン」ヨリ減縮セラレタルニ不拘右ノ如ク不良ニシテ「ライオン」ニ
依リテハ十一月二十日現在年「プラン」ノ一四%ナルモノアリ而モ
納入完了期ハ十一月十五日ニシテ本期限經過シタルニ尙右ノ状態ナ
ルヲ以テ「ウクライナ」内閣ハ十二月一日付決定ヲ以テ納入率三七
%以下ノ二十「ライオン」ニ於ケル馬齡薯ノ賣買ヲ右納入義務完了
迄禁止スルニ至レリ而シテ其後徵收ヲ續ケ十二月二十五日迄ニ三十
六萬噸「プラン」ノ五八%ヲ納入セルノミナリ
「オデッサ」ニ於ケル馬齡薯ハ品質ハ昨年ニ比シ惡ク供給非常ニ惡
ク市場出廻モ極メテ少量ニシテ年末ニハ一疋五留ニ達シタリ

在オデッサ日本帝國領事館

(三) 種油作物

一九三二年收穫ノ種油作物ノ買上計量ニ關シ聯邦内閣ハ十月三日付決定ヲ以テ「ガルトツエ」税及貸付種子返納分ヲ除キタル量ヲ左ノ通り定メタリ(單位千噸)

	一九三二年	一九三一年計量
向日葵種	一、三六八五	一、六八〇
大豆	七七一	一八六
蓖麻子	五〇三	五八

右大豆買上ノ地方別ニ付テハ「ウクライナ」四萬五千噸、北高架索一萬一千噸、極東一萬三千二百噸、後高架索七千噸ヲ主タルモノト

在オデッサ日本帝國領事館

ス

買付終了期ハ一九三三年一月十五日トス

向日葵、大豆、蓖麻子等ノ種油原料作物ハ地方ニハ今日尙未タ收穫セサルモノ、打落ヲセサルモノアリ又收穫ヲ秘シ枯死シテ無收穫ナリト稱シ居ルモノモアリ從テ買上計量モ立案其モノモ遲レ買上事業モ十一月末迄ニ豫定高ノ六、七割ヲ徵收スヘキ筈ノ處地方トシテ又一種類モ此豫定ニ近キモノナク農産物納入成績ノ比較的良好ナル中央黒土地方ニ於テサヘ十二月一日迄ニ向日葵ノ納入量ハ「ブラン」ノ半分ニシテ其絕對數量モ前年同期ニ比シ四七%少ナク十月末迄ニ約六萬噸ノ向日葵ハ地方手工業ノ手ニ分散シ政府ニ納入セル分ハ十二月一日迄ニ三〇、六%ナリ

在オデッサ日本帝國領事館

右ノ状態ニテ植物油ハ極ク少量ニテ需要ヲ充タスニ足ラス今日既ニ
賣物無キヲ以テ「マルガリン」又ハ獸脂ヲ以テ之カ缺ヲ補ハサルヘ
カテサルニ至レリ

棉花

棉花作付地積ハ一九三一年ハ二百十三萬七千一ヘクタールニシテ前
年ニ比シ三六四%ノ増加ナルカ本一九三二年ハ二百四十三萬七千一
ヘクタール即チ前年ニ比シ一四%増ノ豫定ナリシ處實績ハ二百三十
四萬八千一ヘクタール即チ「ブラン」ノ九五五%、前年ニ比シ九八
%増加ナリ

收穫高ニ付テハ本夏棉花耕作ニ當テ除草其他手入ヲ怠リ作柄モ良カ

在オデッサ日本帝國領事館

ラス收穫モ進捗セス雪ノ下ニ未收穫ノ儘殘存セルモノサヘアル由ナ
リシカ「クイブイシエフ」報告ニ依リ算出スレハ收穫率ハ一ヘク
タールニ付八七「ツェントネル」ノ豫定ニ對シ七四「ツェントネル
」ナルヲ以テ百五十八萬噸トナル譯ナリ

生棉花ノ政府買上高ハ全聯邦ニテ一九三一年ノ百二十七萬噸ニ對シ
一九三二年ハ百四十四萬噸ノ豫定ナルカ其實績ハ十二月十五日現在
ニテ百九萬噸、年「ブラン」ノ七五五%ニシテ右買上絶對數量ハ前
年同期ニ比シ三一%多キモ買上「テムボ」ハ前年同期ニハ八七八%
ヲ實行シ居タリ

地方別ニ依ル生棉花納付成績ハ棉花主要栽培地タル中亞方面ハ新地
ニ比シ良好ニシテ十二月十五日現在「ウズベクスタン」ハ八三一%

在オデッサ日本帝國領事館

「キルギジャ」ハ八三・五%ナルカ「ウクライナ」及北高架索地方ヲ
 含ム新地ハ六四%ナリ右新地ノ内「ウクライナ」ハ十二月一日迄ニ
 一七五八五噸豫定ニ對シ四三・八%ナリ
 「クリミア」ハ一月一日三四・五%ニシテ後高架索ハ十二月二十九日
 迄一一・一、九三七噸、年「ブラン」ノ七三・三%ヲ買付ケタリ
 社會部門別ニ付テハ「ソフホズ」ハ十二月十日迄ニ收穫ハ五五%ヲ
 棉花政府納入ハ年「ブラン」ノ三、九%ニシテ不成績ナリ
 棉花ノ買付終了期ハ十二月二十日ナル處右ノ散漫ナル資料ニ依テ見
 ルニ豫定期限ニハ八割ノ成績ヲ得タルノミナリ

在オデッサ日本帝國領事館

(四) 麻 類

一九三二年ノ亞麻作付地積ハ二百五十一萬「ヘクタール」、統制數字
 豫定計畫ノ九八%ヲ實行シ前年ニ比シ七%ノ増加ナリ其收穫高ハ五
 十萬二千噸トス

麻類ノ買上ニ付テハ二月十四日付勞働國防會議ノ特約ニ關スル決定
 ニ依リ定メラレタルカ其數量左ノ如シ(單位千噸)

亞麻纖維	二〇二・五
同 莖	八三〇
同 稈	三九
纖維ニ換算シ計	三七五

在オデッサ日本帝國領事館

大麻纖維 七〇
 同 莖 三〇〇
 同 稈 八〇
 纖維ニ換算シ計 一二〇
 亞麻種 三〇〇
 大麻種 一一〇

大麻ハ「ヨルホズ」許可ニ關聯シ六月五日付内閣決定ニ依リ右特約ニ依ル納入量ヲ三割方減少セラレタリ

特約麻類納入期限ハ前年ヨリ早ク完了スルコト、シ亞麻纖維ハ年末迄ニ八〇%、大麻ハ六〇%、殘部ハ亞麻ハ一九三三年二月末、大麻ハ七月末迄ニ完了、種子ハ兩種共十一月末迄トセリ

在オデッサ日本帝國領事館

納入實況ニ付テハ十一月十日迄ニ納入済ノ成績左ノ如シ

十一月一日迄ノ豫定 十一月十日迄ノ實績

亞麻纖維	三〇%	二一、九%
大麻纖維	一三	三一
亞麻種子	七四	四〇、六
大麻種子	四二	一七、五

「ウクライナ」ニ於ケル十一月十日迄ノ實績ハ亞麻纖維ニ三%、大麻纖維四二%ナリ

麻類ノ納入ハ穀物程重要ニ非ス尙其後ニ於テ納入セシムルコトヲ得ルトスルモ成績不良ト謂ハサルヘカラス

麻類ノ粗製工場モ多數(三二年中四六四ヶ所)新築セラレタルカ其

在オデッサ日本帝國領事館

成績良好ナラス其結果製麻工場原料供給ニ困難ヲ來シ麻本廳所屬麻粗製工場ノ生産ハ第四期中亞麻纖維ニ付テハ必要量ノ五割内十月中四千噸豫定ノ處実績二千二百噸ニシテ大麻ニ付テハ十月七千噸ノ豫定ニ對シ二百六十七噸ナリ

的 爾 菜

一九三二年ノ甜菜作付地積ハ百六十五萬一ヘクタールノ豫定ニ對シ七月一日現在百六十三萬五千一ヘクタール即チ九七九%、昨年六月二十日現在ニ比シ十四萬一千一ヘクタール約九%ノ増加ナリ本年ノ政府買上計畫ハ九月十七日付内閣決定ニ依リ左ノ通り定メラ

在オデッサ日本帝國領事館

レタリ (單位百萬噸)

全 聯 邦	一、二〇七	
内 砂糖ソフホマ	一、七七七	
M T C	六四	
其他ノ「コルホマ」	一、六	
個人農家	二、三	
地方別ノ重ナルモノ		
		農民部
ウクライナ	八、一	ソフホマ
中央黒土地方	三、三	〇、六
計	一、一、四	一、六

在オデッサ日本帝國領事館

新聞「アラウダ」所報ニ依レハ甜菜ノ採掘ハ十月二十五日迄ニ左ノ成績ナリ（單位千ヘクタール）

	採掘地積	對作付地積%
全 聯 邦	七七〇・九	四七・一
内		
ソフホズ	一〇六七	五五・五
コルホズ	五二五・三	
個人農家	一三八・九	

地方別

ウクライナ	五二・三	四一・九
中央黒土地方	二一九・八	七〇・四

其後ノ報道ニ依レハ「ソフホズ」ノ中甜菜「ソフホズ」所屬栽培地

在オデッサ日本帝國領事館

ニ於ケル十一月十一日迄ノ採掘高ハ九十四萬九千噸、作付地積ノ六
 六八%ニシテ右數量ハ買上「プラン」ノ五三・七%ニ當ル
 「ウクライナ」ニ於ケル採掘高ハ「ウクライナ」農務部發表ニ依レ
 ハ十二月二十日迄ニ作付地積ノ五八・九%即チ七十三萬二千九百一ヘ
 クタール（内「ソフホズ」八萬一千五百一ヘクタール）ナリ

（「ウクライナ」農務部發表ニハ甜菜收穫豫定反別ヲ七十七萬
 一千一百一ヘクタール）トシアリ作付反別トノ間ニ大ナル開キ
 アリ其差額ハ枯死セルモノナリヤ作付ヲナサ、リシモノナリ
 ヤ又他ノ原因ニテ收穫豫定ニ算入セザリシモノナリヤ判スヘ
 キ資料ナキヲ以テ暫ク其儘トナス）

甜菜ノ收穫率ハ新聞「アラウダ」所報ニ依レハ一ヘクタールニ付
 「ウクライナ」ハ最低五〇（キエフ州）最高六七九（ウインニツア

在オデッサ日本帝國領事館

州)平均六三三「ツエントネル」、中央黒土地方八、四「ツエント
 ネル」ニ當ルヲ以テ統制數字豫定ノ一四五「ツエントネル」及買付
 計畫ニ示シタル作付反別ニ對スル買上計畫量ノ割合ナル七三、八「ツ
 エントネル」ニモ及ハス尤モ「ウクライナ」ニ付テハ當初ノ採掘方
 法粗雜ニシテ畑中ニ殘存スルモノ多キヲ以テ再採掘シタルニ「ヘ
 クタル」ニ付約一〇「ツエントネル」ヲ穫タル由ニ付「ウクライナ
 」ノ收穫率ハ七二「ツエントネル」ニ當ル「タイプイシエフ」報告
 ニ依リ算出スルニ一九三二年全聯邦甜菜ノ收穫率ハ七五、七「ツエン
 トネル」ニシテ豫定ノ五二%ナリ

甜菜買上成績ニ付テハ十月三十一日迄ノ買上量左ノ如シ(單位千噸

在オデッサ日本帝國領事館

ソユズサハル	三、七九五五	對ブラン%	三一、七
内			
ウクライナ	二、三〇七六		二八、五
ロシヤ	一、四八七九		三七、五

其後ノ買上成績ニ關スル資料ナキモ「ウクライナ」ニ於テハ十一月
 一日ヨリ十二月二十日迄ノ間ニ於ケル甜菜採掘ノ割合ハ「ブラン」
 ノ一七%ナルヲ以テ買上モ此率ニ準スルモノトシテ計算スレハ本年
 ノ甜菜買上高ハ豫定ノ半分ナリ

而シテ右買付甜菜中奥地又ハ途中ニ停滯シ工場ニ搬入セラレサルモ
 ノ幾分アリ「ウクライナ」ニ於テハ一九三一年中工場へ搬入セル高
 ハ收穫高ノ八〇%ナリシカ本年ハ十一月末迄ノ成績ニ依ルニ七三、八

在オデッサ日本帝國領事館



※ナリト

「ソユマサハル」所屬諸工場カ十一月十一日迄ニ收容セル甜菜ハ三百六十六萬六千噸餘ニシテ全聯邦買上年「ブラン」ノ三三・七％ニ當ル

同日迄同諸工場ノ製糖ニ使用セル甜菜量ハ二百七十七萬四千噸ニシテ製糖ハ十一月一日迄ニ二十四萬四千噸ニシテ同期豫定ノ六十萬噸ニ對シ四〇・八％ナリ

右ノ如ク甜菜ノ作付地積ハ略々豫定ニ近カリシモ收穫高ハ作付地積ノ收穫迄ノ間ニ減少セルト作柄ノ不良、收穫法ノ不良等ニ依リ豫定「ブラン」ノ半分ニシテ其後買付業績ノ不良、運搬未完ノ爲メ收穫高ノ二割程度ヲ失ヒ其結果製糖高ハ豫定ノ四割ニ及ハサルニ至レリ

在オデッサ日本帝國領事館

右全體ノ適切ナル現象トシテ新物精製氷砂糖ハ「オデツサ」ニ於テ十二月初メ國營商店ニテ一疋十留ニテ賣出シタルカ同月末十五留ニ値上ケシ且定量配給ハ新物ノ產出ニ依リテモ恢復セラレサリシヲ以テ住民ハ右高キ商價ニ依リ購入ヲ餘儀ナクセラレタリ而モ其販賣ノ數量ハ甚タ少ナシ

三 農産物及畜産物ノ政府買上法ノ改正

從來政府ハ穀物、工業原料作物及畜産物ノ買上ハ農民ト豫メ契約シ

在オデッサ日本帝國領事館

一定地域ノ作付又ハ一定量産物ノ納入量ヲ定メ之ニ對シ前渡金交付等ノ援助ヲ與ヘ居リシカ其納入成績ハ供給不良ノ爲メ自己生活ノ保障ナク勞作ノ効果少ナク又收穫大ナラサル爲メ兎角不良ニシテ殊ニ一九三一年ヨリ一九三二年ニ入り益々不良ニシテ當局ノ努力ヲ以テシテモ「ブラン」ノ實行ヲ期シ難キモノアリシヲ以テ遂ニ強制力ヲ加フルコト、シ一九三二年九月二十三日付肉買上法ニ關スル内閣及黨本部決定ヲ以テ同年十月以降右特約法ヲ廢止シ租稅トシテ一定率ヲ賦課納入セシムルコト、シ牛乳及穀物ニ付テモ一九三三年ヨリ同一方法ヲ採ルコト、セリ

肉及牛乳並ニ穀物徵收法ニ關スル決定ノ要領左ノ如シ

在オデッサ日本帝國領事館

82

(一) 肉

聯邦内閣及黨本部ハ一九三二年九月二十三日付決定ヲ以テ肉買上法ヲ定メタルカ其要領左ノ如シ

一 「ソフホズ」ノ納入量

各「ソフホズ」ハ一九三二年十月ヨリ一九三三年末迄ニ肉三十萬噸（右期間前十五ヶ月間ノ納入量十三萬噸）ヲ納入スヘク之ヲ十七ノ「ソフホズ」合同ニ割當テタリ

二 買上法

一九三三年十月以降個人農家及「コルホズ」農家ニ對シテハ租稅ノ効力ヲ有スル肉納入義務ヲ負ハシム

在オデッサ日本帝國領事館

83

三 納入率

肉納入率ハ(イ)個人農家(ロ)畜産商品農場ヲ有セサル「コルホズ」農家ト(ハ)之ヲ有スル「コルホズ」農家ノ三級及二十八地方ヲ四類ニ分チ十二種ノ率ヲ定メ最高第一類地方個人農家ハ十五ヶ月間ニ一戸ニ付五〇疋、最低第四類地方畜産商品農場ヲ有スル「コルホズ」農家ハ十五疋トシ「ウクライナ」ハ第三類地方ニシテ四五、三〇及二〇疋ノ率ナリ

四 納入期

肉納入期ハ各三ヶ月宛五期ニ分チ二十地方各箇ニ其割合ヲ定メタルカ全聯邦及「ウクライナ」左ノ如シ

一九三二年 一九三三年

在オデッサ日本帝國領事館

	第四期	第一期	第二期	第三期	第四期
全 聯 邦	二六	一四	一四	二〇	二六
ウクライナ	三二	一五	一三	一九	二一

五 畜産商品農場ノ納入率

畜産商品農場ハ一九三二年十月一日現在ノ家畜ニ對シ左ノ率ヲ納入ス

牛乳農場ハ成牝牛一頭ニ付三十疋

牛肉農場ハ家畜一頭ニ付三十疋

養豚農場ハ母豚一頭ニ付百二十疋

養羊農場ハ母羊一頭ニ付十疋

六 右納入義務ヲ怠ルモノハ納入未了分ノ市場價格ニ相當スル金額

在オデッサ日本帝國領事館

ノ罰金ニ處ス

(二) 「バター」、牛乳及「チーズ」

聯邦内閣及黨本部ハ一九三二年十二月十九日付決定ヲ以テ一九三三年度「バター」牛乳及「チーズ」ノ買上法ヲ定メタルカ其要領左ノ如シ

(一) 「ソフホズ」ノ納入量

「ソフホズ」ノ牛乳納入量ハ「バター」ニ換算シテ一九三二年ノ二萬二千噸ニ對シ三萬七百噸(三九五%増)トシ其内譯左ノ如シ
穀物及畜産部所管 二四九七五 噸

農務部所管

一、五〇五

在オデッサ日本帝國領事館

供給部所管

三、九四〇

其他

二八〇

三、買上方法

從來ノ特約ニ依ル方法ヲ廢シ農民ノ所有スル牝牛ニ對シ租稅ノ手續ヲ以テ牛乳ヲ國家ノ定ムル價格ニテ國家ニ義務的ニ納入セシムルコト、ス

三、納入率

牛乳ノ納入率ハ(イ)個人農家(口)商品牛乳農場ヲ有スル「コルホズ」農家ト(ハ)之ヲ有セサル「コルホズ」農家トニ區別シ全國各地方ヲ四類ニ分チ牝牛一頭ニ付年納入額最高二八〇「リットル」(第一類地方個人農家)最低五〇「リットル」(第四類地方牛乳商品農

在オデッサ日本帝國領事館

場ヲ有スル「コルホズ」農家トス
「ウクライナ」ハ中央黒土地方同様ニ第三類ニ屬シ一七〇、一一〇、八〇「リットル」ナリ

四 納入期

農民ノ年納入量ハ四期ニ分チ各地方ニ付其「パーセンテージ」ヲ一定シアルカ「ウクライナ」ハ第一期一五%、第二期四〇%、第三期三五%、第四期一五%ニシテ第二、三兩期中ニ六五―七五%ヲ納入スルコト、セリ

五 牛乳商品農場及「コルホズ」ノ共有家畜ニ付テハ牝牛一頭ニ付年額前記四類ノ地方別ニテ五八〇―三五〇「リットル」トセリ

六 制裁―肉納入義務ノ場合ト同様

在オデッサ日本帝國領事館

七 納入牛乳ノ買上價格ハ「リットル」ニ付十五哥トス

(三) 穀物

聯邦内閣及黨本部ハ一月十九日付ヲ以テ「コルホズ」及個人農家ノ穀物義務的納入方ニ關シ決定スル處アリタルカ其要領左ノ如シ

一 本決定目的ニ付テハ其前文ニ穀物ノ收穫率向上及作付地積ノ擴大並ニ穀物ヲ國家ニ納入スヘキ「コルホズ」及個人農家ノ一定不變ノ義務ヲ適時ニ決定スル爲メナル旨ヲ記セリ

二 從來ノ特約法ヲ廢止シ租税ノ効力ヲ有スル穀物納入義務ヲ之ニ依リテ定ム

三 納入率ハ「コルホズ」ト個人農家トニ別々ニ定メ「コルホズ」

在オデッサ日本帝國領事館

ノ納入率ハ二十三ノ州及共和國ニ付MTCヲ利用スルモノト然ラサルモノトニ二分シ實際作付反別一「ヘクタール」ニ付(イ)MTCヲ利用セサルモノハ最大三、三「ツエントネル」(クリミヤ)最少〇、八「ツエントネル」(「レニングラド」及「イワノフ」州北部地方、白露、後高架索)トシ(ロ)MTC利用ノモノハ低率ニテ最大三、七「ツエントネル」(「クリミヤ」及東部西伯利)最低〇、五「ツエントネル」(後高架索)トシ(ハ)「ウクライナ」ハ第三位ノ三、一及三、五「ツエントネル」、中央黒土地方ハ第四位ノ三、〇及三、六「ツエントネル」、北高架索ハ第五位ノ三、五及三、一「ツエントネル」ナリ

穀物中各種類別ノ納入率ハ労働國防會議ニ於テ定メ聯邦共和國地

在オデッサ日本帝國領事館

方執行委員會ハ夫々管内各地ニ付之ヲ定ムルコト、セリ
四 納入期

「コルホズ」ノ納入期ハ七月ヨリ十二月迄ノ間ニ四ヶ月乃至六ヶ月トシ地方ニ依リテ別々ニ期限及歩合ヲ定メアリ例ヘハ「クリミヤ」及後高架索ハ七月ヨリ十月迄、「ウクライナ」ハ六ヶ月、北高架索及中央黒土地方ハ八月ヨリ十二月迄トセル如ク納入ノ最盛ハ最南部ハ早ク九月迄ニ大部分ヲ完了スルコト、ナレルモ南部主要農耕地方ハ八月ヨリ十月迄ノ間ニシテ十月迄ニ七、八割ヲ完了スヘキコト、セリ

五 個人農家ノ納入手續ハ現行穀物納入法ノ通りニシテ即チ村「ソウエト」ハ各戸ニ付實際作付地積ニ依リ「コルホズ」ヨリ五、一

在オデッサ日本帝國領事館

○%高率ニテ決定ス
其納入期ハ南部ハ九月末、中央部ハ十月十五日、其他ハ十月末迄
トス即チ「コルホズ」ニ比シ期限早ク「コルホズ」ハ右期間ニ五
五―六〇%ヲ納入スルニ過キス
六 納入穀物價格ハ据置
七 穀物商業ハ納入義務完了ノモノニ對シテ之ヲ許スコト現行ノ通
リ
八 納入遲滞ノ制裁ハ牛乳及肉ノ場合ト同様

在オデッサ日本帝國領事館

92

三 商業

商品ノ供給ニ付テハ本年十一月間累計商品取扱高ハ三百四億留ニ
シテ一九三一年全年ノ取扱高二百四十七億留ニ對シ五十七億留ノ増
加ナリ
本期各月ノ取扱高ニ付テハ資料ナキモ八月以來毎月取扱高増加シ前
月ニ對シ八月ハ三二%増、九月ハ一〇三%増、十月ハ一〇四%増ナ
リシカ十一月ハ増加ノ「テムボ」少シク少ナク前月ニ對シ六八%増
ナリ

在オデッサ日本帝國領事館

93

商品ノ村落ニ仕向ケタルモノ、割合ハ第一期三一%、第二期三一%、第三期四一%ナリシカ第四期ニ入り農産物買上事業モ下向ニナリタル爲メ低下シ十月ハ三五七%、十一月ハ三三二%トナレリ商品取扱ノ費用ハ益々増加シ十月ハ七二%ノ「プラン」ニ對シ九九%、所ニ依リテハ一七五%ニモ上リタリ

四 労働者ニ對スル供給制度ノ變更

在オデッサ日本帝國領事館

聯邦政府及黨本部ハ十二月四日付労働者ニ對スル供給上工場管理ノ權能増加及切符制度ノ改善ニ關スル決定ヲ以テ對労働者供給組織改善、食料及工業製品ヲ事實上労働セサル者ニ配給セラル、ヲ防止シ工場長ノ權限増加ノ目的ヲ以テ左ノ方策ヲ講スルコト、セリ

一、特別配給所ノ商店及副業ヲ工場管理部ニ移スコト

イ 特定ノ大工業二百六十二企業ニ於テハ労働者ニ對スル食料品及工業製品ノ供給ヲ直接工場管^理部ニ移シ特別配給所ノ全機構及長期貸金ノ條件ニテ其商品、現有ノ金錢物品、食堂及野菜畑養畜禽場漁場等ヲ移スコト

ロ 右企業ニ於ケル從來ノZPK（專屬特別配給所）ノ代リニ工場管理部ニ労働供給科ヲ設ケ其科長ニハ原則トシテ從來ノZP

在オデッサ日本帝國領事館

K 議長ヨリ選任スヘキ専門ノ工場副長ヲ置ク

ハ 右移管セラレタル資本ハ工場商店食堂副業ノ運轉資金トシ其財務ハ獨立會計トス

ニ 工場商店ハ當該企業ノ從業者ニ非サルモノニ對シ嚴重閉鎖シ仕入ハ從來通り聯邦供給部ノ責任及指導ノ下ニ「コオペラチーフ」及國營ノ「バザル」ヨリ行フ

ホ 供給組織ニ對スル勞働者ノ参加及其監督ノ爲メ供給科ニ各部賣場食堂代表者ヲ以テ組織スル供給諮問會ヲ設ク

ヘ 工場商店員ハ給與上工場職員ニ準ス

三 特別配給所ノ工場管理部隸屬

第一項ノ大工業以外ノ企業並ニ鐵道及交通部所屬企業ニ於テ特別

在オデッサ日本帝國領事館

配給所カ消費組合系統ニ殘存スルモノニ於テハ左ノ事項ヲ必要ト認ム

イ 工場管理部ノ勞働者ニ對スル根本物品配給組織ニ關スル權限責任及實際的参加ヲ増シ之カ爲メ配給所業務ハ「ツェントロソユズ」及其機關ノ指令ニ從フト共ニ工場管理部ニ隸屬スルコト

ロ 業務ノ形態ハ「コオペラチーフ」トナシ置キ其議長ハ勞働供給科長タル工場副長ニ於テ之ヲ選任ス

ハ 工場管理部ハ配給所ノ業務改善ノ爲メ物質的財務的援助ト便宜ヲ供與スルコト

三 特別配給所ヲ有セサル企業ニ於ケル供給ノ組織ニ付テハ特別委員會ニ於テ立案スルコト

在オデッサ日本帝國領事館

四 切符

切符ノ整理及取締ノ爲メ切符交付ノ手續ヲ左ノ通り定ム
イ 労働者及其家族ニ對スル切符(タロン)ハ工場管理部ニ於テ
發給シ記名式トシテ番號ヲ附ス
ロ 切符ハ監督及會計ヨリ支拂書計算帳並ニ勞銀ト共ニ交付ス
ハ 企業ヨリ免職セラレタルモノハ右切符並ニ當該企業所屬住宅
ノ使用權ヲ喪失ス
ニ 工場管理部ハ免職セラレタルモノヨリ右切符ヲ取上ケ若シ之
ヲ投機的ノ用ニ供シ濫用セルモノハ刑法ノ規程ニ依リ處罰ス
ホ 新入労働者及其家族ニ對シテハ從前ノ居住地勞働地ヨリ切符
返還ノ有無ヲ照會シタル上ニテ交付ス

在オデッサ日本帝國領事館

ヘ 切符帳ハ所屬商店ニ登録シテ之ヲ交付ス
右移管ハ年末迄ニ完了スヘキコト

本決定ハ勞働紀律ヲ保持スル手段トシテ發布セラレタル缺勤者ニ對
スル制裁ノ副タル措置ニシテ一方ニ缺勤及免職労働者ニ對スル供給
ヲ停止シ以テ供給困難ヲ幾分タリトモ緩和シ工場管理部ヲシテ常ニ
労働者ノ出缺ヲ監視セシメ何時ニテモ必要ノ制裁ヲ與ヘ得ル様ニセ
ルモノニシテ労働者ニトリテハ甚ダシク嚴格ナル制度ナリ

在オデッサ日本帝國領事館

第五 勞 働

一、 行政經濟機關ノ機構縮少職員整理

聯邦内閣ハ十月八日付決定ヲ以テ

一、 共和國及地方ノ「ソウエト」及經濟機關ノ「モスクワ」ニ於ケル代表機關並ニ中央機關ノ地方ニ於ケル代表機關ヲ半減スル案ヲ

在オデッサ日本帝國領事館

100

作成スルコト

二、 各人民委員部定員委員會ヲ設ケ各機關ノ定員ヲ定メ監察部ノ許可ナクシテ増員スルヲ禁シ現在人員ヲ一〇—二〇%減少セシム

三、 アル農工業合同ヲ解散スルコト

四、 獨立會計ニ依ル機關ノ定員委員會ヲ設ケ定員ノ増加ヲ禁シ現有員ノ八一—一〇%ヲ減少スルコト

五、 聯邦監察部ノ査認及内閣ノ許可ナクシテ新ニ官廳局課等ヲ開設スルヲ禁ス

右人員減少ニ依リ生スル空席ハ市「ソウエト」ノ豫備トナシ置ク等規定セリ

右規定ノ實施ノ爲メ監察部ハ「モスクワ」ニ於テ四十三代表機關ノ

在オデッサ日本帝國領事館

101

勤務員七百六十五人ノ中五百七十七人ヲ減員シ工業、建築、工場等
 百五十三代表機關ニ於テハ三千六百六十八人中二千五百三十八人ヲ減
 少シ百三十四機關其人員七百九十六人ヲ廢止シ商業及「コオペラチ
 ーフ」ニ付テモ同様ニテ合計三千九百人ヲ減シ之ヲ地方ニ廻ハスコ
 ト、シ十一人民委員部及中央官廳ニ於テハ一萬三千五百七十五人中
 二千八百九人即チ二〇、七%ヲ減員スルコト、セリ而シテ黨統制委員
 會及聯邦監察部ハ十二月十七日左ノ如ク追加淘汰ヲ行ヘル旨發表セ
 リ

代表機關	現員	減員
モスクワ	三一〇	四二〇人
減少	五七	三〇六
廢止	二〇六	二〇六

在オデッサ日本帝國領事館

●ハリコフ

減少	一一	一三九	一一九
廢止	一二	八〇	八〇

就中重工業部ニ於テハ管下五十五合同及「トラスト」ニ涉リ十月一
 日現在従業員九七五三人ノ一七%ヲ十二月二十日迄ニ減少整理スヘ
 キ旨十二月十三日付省令ヲ以テ公布セリ

「オデツサ」ニ於テハ十二月七日ノ州監察部及黨統制委員會幹部會
 ノ決定ニ依リ四十機關ニ涉リ百人ヲ減シタリ

行政經濟各機關ニ涉ル人員ノ整理ハ一九三一年十一月ニモアリ最近
 毎年年末ニ於ケル一種ノ行事ノ如キ觀アルカ殊ニ一九三一年以來國

在オデッサ日本帝國領事館

民經濟ノ各方面ニ涉リ機關ヲ専門化シ細別シ職員ハ夥シク増加セルカ有能者乏シク例ヘハ高等専門學校教授ノ如キ生理上堪ヘ得サル程ニ掛持ノ時間及場所多ク一般ニ能率揚ラス經費ハ徒ニ膨脹シ經濟機關ハ損失ヲ招クカ如キ現象ヲ呈シ緊縮ヲ必要トスルニ至レルモノナリ而シテ工場労働者モ一般操短傾向及原料及燃料等ノ不足ニ依リ免職者又ハ休職者頗ル多ク今ヤ失業者ノ數モ相當ニ出來セリ

三 軍人ニ對スル増俸

在オデッサ日本帝國領事館

内閣ハ十一月五日付決定ヲ以テ十月革命十五年ヲ紀念スル爲メ陸海軍人ノ俸給ヲ増加スル旨ヲ公布セルカ右ニ依レハ

- 一、兵卒ハ兵種ニ依リ差異アルカ月手當六留（歩騎兵）乃至九留（特科）下士ハ十五留乃至三十留
- 二、學生ハ一年生三十留、十留上リニテ三年生五十留
- 三、期限外勤務者ニ對シテ八月二十留ヲ増額ス
- 四、航海兵員ノ手當ハ倍加ス
- 五、指揮官ハ（一）陸軍ハ兵種ニ依リ四種ニ分チ三級ヨリ十三級ニ至ル各將校ハ大體上級ニ至ルニ從ヒ遞増スルコト、シ四一、二%乃至八三、七%ヲ（二）空軍ハ四級ヨリ十一級迄五〇%乃至八三、三%ヲ（三）海軍ハ四級ヨリ十三級迄三八、九%乃至七七、四%ヲ（四）技術員ハ三級ヨリ

在オデッサ日本帝國領事館

十一級迄三七五%乃至五三、八%ヲ増給スルコト、ス
右増給率ノ最高ナルハ陸軍ニ在テハ砲兵科ノ師團副長(十一級)ノ
八三、七%、空軍ニ於テハ旅團長(十一級)ノ八三、三%、海軍ニテハ
戦隊司令(十二級)ノ七、七、四%、技術官ニ於テハ射撃科學試験場長
(十級)ノ五、五、二%ナリ

本増俸ハ本「デクレット」前文ノ趣旨ニモ依レト物價騰貴ノ對策モ
含マレ且増俸ノ上ニ厚キハ經濟機關ニ於テ賃銀ノ平衡主義ヲ排シ熱
練及仕事ノ難易ニ依リ差等ヲ設ケタルト同一趣旨ニシテ之ニ依リ各
人ノ能力及位置ノ差ハ其生活收入ニモ現ハル、傾向益々顯著トナレ

在オデッサ日本帝國領事館

106

三、無斷缺勤者嚴罰

聯邦中央執行委員會及内閣ハ十一月十五日付決定ヲ以テ重大ナラサ
ル原因ニ依リ缺勤セル者ヲ免職スル件ヲ公布セリ右決定ハ「ロシヤ
」聯合及其他聯邦共和國勞働法(第四七條ノE)ノ規定ニハ重大ナ
ル原因ナクシテ缺勤セル勞働者ノ免職ハ一ヶ月ニ計三日ニ涉ルトキ
ハ之ヲ行フコトヲ許容セルカ方今失業者無キ際右ノ規定ハ缺勤ヲ獎
勵シ生産ノ進捗ヲ妨ケ勤勞民ニ損害ヲ與フルモノナルヲ以テ(一)右規
定ヲ廢止シ(二)一日タリトモ重大ナル理由ナク缺勤シタルモノハ企業

在オデッサ日本帝國領事館

107

又ハ官廳ヨリ免職シ其企業又ハ官廳カ與ヘタル食品券、工業製品券
及住宅ノ使用權ヲ剝奪スル旨ヲ定メタリ

本法發令ニ關聯シ聯邦勞動部長「チホン」カーイヌベスチヤ（十
二月一日）紙ニ記載セル處ニ依レハ重要工業ニ於ケル缺勤者ハ石炭
業ニ於テハ一九三一年八月ニハ勞動者千人ニ付百十人ノ割合ナリシ
カ本年八月ニハ百三十三人トナリ金屬工業ニ於テハ昨年十二月中ノ
三十九人ハ本年八月五十四人トナリ機械製造業ニ於テハ同期間ニ四
十三人ヨリ七十六人トナリ化學工業ニ於テハ三十二人ヨリ四十四人
トナリ輕工業ニ於テモ同様ニテ綿業ハ昨年七月四十一人ニ對シ本年
七月ハ七十人トナリ製麻業ニ於テハ同期間ニ四十三人ヨリ五十六人
ニ、製靴業ハ三十三人ヨリ四十五人ニ、裁縫業ハ三十七人ヨリ六十

在オデッサ日本帝國領事館

108

一人トナレリ（又「ブラウダ」紙ニ依レハ「ロシヤ」聯合輕工業部
所管工業ニ於ケル右缺勤者ノ割合ハ本年第一期一％、第二期一六
％、第三期三％トナレリト）而シテ各個企業ニ於テハ甚ダシキモノ
アリ「ウラル」ノ「キゼル」炭坑ニ於テハ登簿勞動者四千九百人中
實際勞動セルモノハ三千六百人ニシテ千三百人ノ休業者アリ其結果
生産「ブラン」實行率ハ四二・四三％トナレリ

右ノ如ク缺勤者ハ最近益々激増シツ、アルヲ以テ之カ對策トシテ右
決定ヲ見タル次第ナルカ缺勤ノ原因ニ付テ「チホン」ハ缺勤者ノ多
クハ村落ヨリ來レル未熟練職工及異分子ナリト云ヒ居ルカ原因ハ勞
働者ニ對スル供給ノ不良ニ依ルモノニシテ本法ノ供給ニ關スル制裁
ト共ニ同時期ニ勞動者ニ對スル供給制度ヲ改メ從來ノ工場特殊配給

在オデッサ日本帝國領事館

109

所「コオベラチーフ」工場管理ニ移シタルニ願ミルモ明カナリ
本法ノ制裁ハ非常ニ嚴重ニシテ免職セラレタルモノハ本法規定ノ特
典ヲ喪失セル上一九三〇年十二月十五日付中央委員會及内閣ノ「勞
働雇備配分及移動防止ニ關スル決定」(第一四條)ニ依リ六ヶ月
間ハ其専門ノ業職ニ從事セシメラレス他ノ重要ナラサル業務ニ就カ
シメラル、規定ヲ適用セラルヘク從テ強制労働ニ就カシメラル、形
トナル

四 勞 銀

在オデッサ日本帝國領事館

110

勞銀ハ一定ノ勞銀基金ノ範圍ヲ超過シテ之ヲ引上クルコトヲ禁シア
リ又一九三二年一月十一日付内閣決定ニ依リ勞働基金ノ月額ハ前月
ノ「^{生産}プラン」ノ實行程度ニ對應シテ定ムヘキ規定ナル處物價ノ暴騰
及勞務者ノ定員外使用、機關ノ濫設等ニ依リ所定ノ標準以上ニ引上
ケ支拂ハレ他ノ一方生産能率ト均衡ヲ失スルモノアルヲ以テ供給部
及「ソフホス」部參與會ハ各々十二月十三日付ヲ以テ右政府規定嚴
守勵行方ヲ定メ違反者ハ免職及其他ノ處分ヲ加フルコト、セリ
右決定中ニ引用セル事例ニハ供給部所管工業ニ於テハ上半期ハ勞働
生産力ノ「プラン」實行率ハ八二・六%ナルニ一日平均勞銀額ハ「プ
ラン」ノ一〇〇%、第三期ニハ勞働生産力九七・八%ニ對シ勞銀ハ一
〇六・六%ニシテ酒精酒類製造業ハ第三期勞働生産力八二・五%、勞銀

在オデッサ日本帝國領事館

111

一三、七％ナル等アリ「ソフホズ」ニ於テハ(一)無許可ニテ又組織的ニ無用ノ勞務者ヲ雇入レ(二)勞銀額ヲ不法ニ引上ケ(三)勞銀トシテ他ノ費目ヨリ流用セルノ事例ヲ舉ケタリ
又「ニコラエフ」農具工場ハ第四期ニ勞銀基金八十萬留ヲ有セル處
十、十一兩月中ニ生産計畫ハ五九六％實行ニ對シ勞銀ハ六十四萬留
即チ八〇％支拂濟ニシテ十二月分トシテ二十四萬留ヲ要スルニ八萬
留不足ナリ又「オヂツサ」農具工場ハ生産「プラン」ノ實行十月ハ
〇％、十一月三九二％ナルニ勞銀ハ一二五％ナリ其他斯ル類例ハ隨
所ニ多々アル由ナリ

在オヂツサ日本帝國領事館

第六 財 務

第三期ノ成績

第三期ニ於ケル取扱高稅收入高ハ四十億九千六百萬留ニシテ「ブラ
ン」ノ九〇、一％ナリ
所謂民間資金ノ動員ハ重要科目ノ分計畫外ノ自課稅四千四百三十萬
留ヲ合算シテ十九億七千八百五十萬留即チ一〇〇、五％ナルカ強制的

在オヂツサ日本帝國領事館

ノモノハ豫定以上ニ徴收セルカ任意の納金ニ屬スルモノハ八三九%ニシテ就中公債收入ハ九三六%ニシテ大缺陷ナキモ貯金局預金ハ三〇二%、消費組合「バイ」五八八%、「トラクトロツェントル」株式應募五八六%ノ大不成績ナリ

第四期ノ財務成績

第四期取扱高稅收入ハ「ブラン」ノ一〇三一%ヲ徴收セリ
民間資金ノ動員ニ付テハ本期徴收額ハ年「ブラン」ノ三六%ヲ占メ其内七七六%ハ任意の納入金ニ屬シ五八%ハ村落ノ負擔ニシテ公債收入ハ本期全收入ノ三八三%ヲ占ムル計畫ニテ村落ニ對シ財務當局ハ勿論黨部ノ盡力アリテ其結果ハ一月十三日付財務參與會議ノ決定

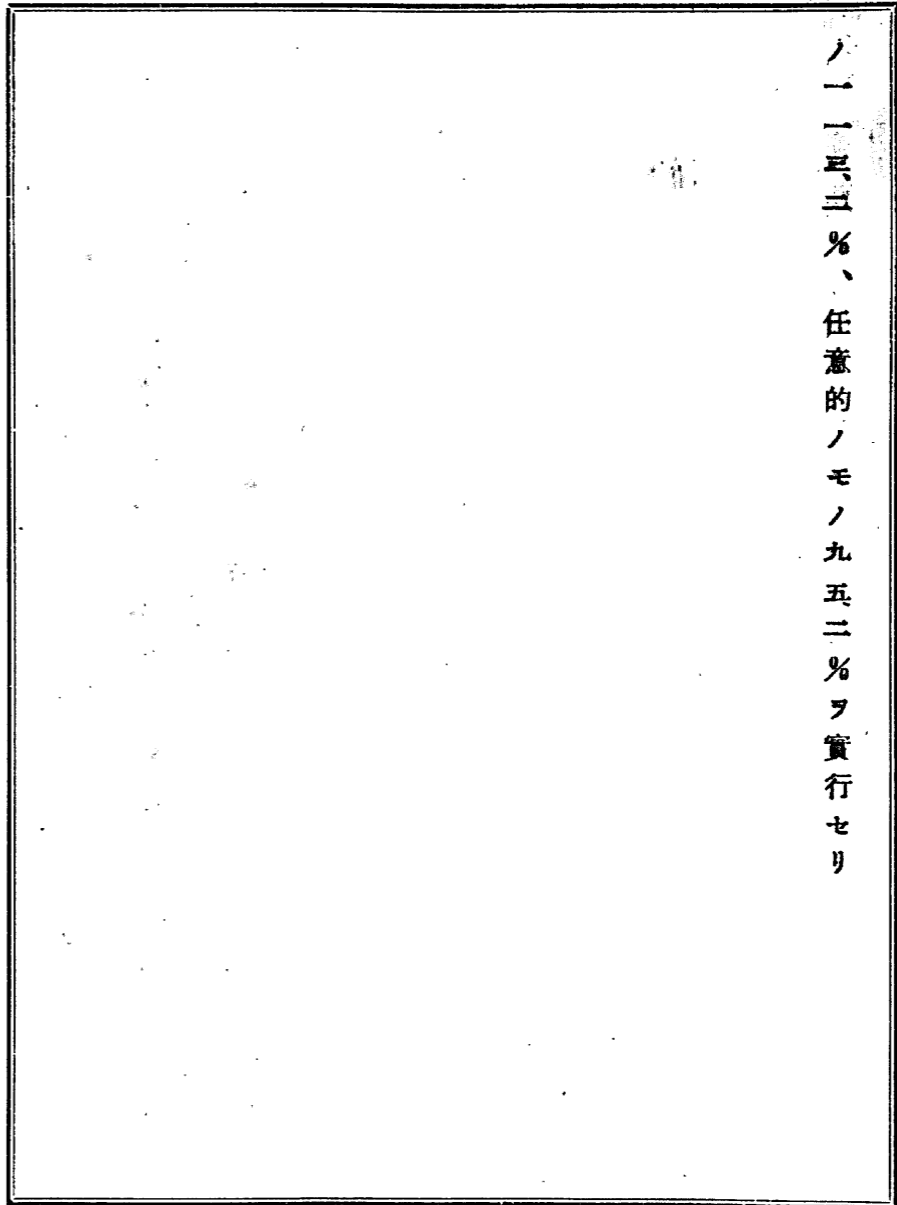
在オデッサ日本帝國領事館

114

ニ依ルニ民間資金動員總徴收額ハ個人農家ニ對スル臨時稅ヲ除キ豫定ノ一〇三九%ニ及ヒ第四期歳入ハ或ル種ノ十二月分ヲ除キ取扱高稅ヲ加ヘテ一〇〇四%ノ好成绩ヲ示セリ
民間資金動員中市部ハ九九二%ナルモ村落ハ一〇六二%ヲ實行シ農業稅自課稅保險料及文化住宅稅等孰レモ豫定以上ノ徴收ヲナシタリ任意のノモノモ第三期ヨリハ徴收成績良好ニシテ公債收入ハ九八七%、貯金局預金ハ五六九%、消費組合「バイ」ハ七四四%ナリ
地方別ニ付テハ「ロシヤ」「ウクライナ」「ウズベクスタン」ハ豫定ヲ超過シタルモ他ハ不足シタリ「ウクライナ」ハ第二、三兩期ニ成績不良ナリシカ第四期ハ民間資金動員一〇五二%、社會化部門ノ收入一〇七八%ニシテ村落ハ一〇三%、都市九五八%、義務的ノモ

在オデッサ日本帝國領事館

115



ノ一三三%、任意的ノモノ九五二%ヲ實行セリ

在オデッサ日本帝國領事館

116

E-0287

0079

3,136 C

166

一九三二年國民經濟ノ大勢ニ關シテハ四半期毎ニ觀察シ來レルガ一
九三二年全年ノ豫定計畫カ如何ニ遂行セラレタルヤヲ檢討スル爲メ
當局ノ報告及新聞雜誌ノ記事ニ依リ主トシテ統制數字記載ノ重要項
目ノ實績ヲ統計的ニ比較セントス。

在オデッサ日本帝國領事館

117

供給の状況

燃料の不足

一九三二年國民經濟豫定計畫ノ概況

運轉の状況

169

工業

工業生産ノ概況

一九三二年統制數字及同様ノ一ノプランニ依ル工業計畫ノ主要事項
ノ實績ヲ表ホレト左ノ如シ。

大工業總生産額	單位	プラン	實績	對プラン	對前年%
十億留		一	三四三		一二四〇

在オデッサ日本帝國領事館

118

11716

發電能力 (年末)	B					機械製造高 農業機械	特殊鋼	壓延鋼材
	客車	貨車	機關車	自動車	トラクター			
百萬キ	百萬個	車	千	百萬留	百萬留			
五 六	〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇	三 七 〇	一 三 〇	七 三 〇	八 二 〇	九 四 〇 〇	〇 六 七 六
四 七	七 四 三 〇	八 三 三 〇	一 七 〇	〇 七	二 六 七	五 〇 二	四 一 二 〇	〇 六 二 一
八 四 〇	七 四 三	四 六 〇	五 六 〇	三 六 六	六 一 二	四 三 〇	九 七 〇	〇 九 〇
一 一 五 〇	一 三 五 〇	八 四 〇	九 八 〇	一 〇 七 〇	一 二 九 八	一 三 三 一	九 四 〇	一 四 五 二

在オデッサ日本帝國領事館

120

11706

鋼	銑鐵	探油	探炭	B		重工業	A
				食品工業	林業部所管		
				百萬噸	百萬噸		
九 五	九 〇	二 七 四	九 〇 〇	三 七 〇	二 九 二	一 三 二	一 六 三
五 八	六 二	二 二 二	六 三 四	三 七 〇	二 〇 三	一 六 三	一 八 〇
六 一 〇	六 九 〇	八 一 〇	六 九 四	七 九 〇	一 〇 七 七	一 〇 七 七	一 一 八 三
一 〇 五 五	一 二 七 七	九 六 八	一 一 六 〇	七 一 七	一 〇 七 七	九 三 八	一 二 八 六

在オデッサ日本帝國領事館

119

E-0287

0082

1173

前年ヨリ内輪ニ見積リタルモノナルカ本表ニ掲ケタル統制數字記載ノ諸項ノ実績ヲ見ルニ豫定ノブランヤヲ超過セルモノハ唯特殊鋼ノミニシテ機械製造高カ稍々豫定ニ近キヲ除ケハ他ノ生産ハ孰レモ大缺陷ヲ示セリ。製鐵及採炭ハ七割未滿、機械製造業中農業機械、トラクター、自動車、機關車、貨車等ハ更ニ不成績ナリ。而シテ右生産高ヲ前年ノ実績ニ比較スルニ重工業一般、農業機械、鐵道車輛、食品工業一般等ハ絕對ニ減産シ從來好成绩ニシテ本年モ豫定ノ八割餘ノ成績ヲ擧ケタル採油ハ遂ニ前年ヨリ減退セリ。右ノ如ク生産カ豫定ニ達セサルニ勞銀ハ人員増加及勞銀引上入等ニ依リ勞銀基金ノ高ノミニ就テ見ルモ豫定ヲ一五%モ超過セリ、斯クシテ質的方面ノ計畫タル勞働生産力ノ増進、工業製品原價ノ低下ハ實

在オデッサ日本帝國領事館

122

長本

望

1172

備考 ▲印ハ十一月間ノ計數

一九三二年ノ工業計畫ハ製鐵及機械製造ヲ主タル標準トシテ編成シ前年ニ對スル増率ハ一九三一年ノ計畫ノ實行カ不成績ナリシニ鑑ミ

工業投資額	工業勞銀基金	大工業勞務者	内 ライオン發電所		發電量	内 ライオン發電所
			時	十億キ		
百萬人	八〇五、〇〇〇	六二一、八〇〇	一〇、〇〇〇	一、七〇〇	三、三二五	
九一六、四〇〇	九二六、〇〇〇		八、三〇〇	一、三三三		
七七〇、一〇九	一一五〇、一四五〇		八、三〇〇	七、八〇〇		
			一四、〇〇〇	一、二三〇		

在オデッサ日本帝國領事館

121

望

1174

現セラレサリキ。

右工業生産豫定計畫ノ遂行未能ノ主タル原因トシテ、スタリントハ國防ノ爲メ軍事工業ニ一部工場ヲ移シタル爲メナリト演説シタリ。其他ノ重ナル原因ハ建設工事が豫定ノ如ク進捗セズシテ完成豫定ノ工場カ作業スルヲ得ザリシニ在リ。

建設 設 00

一九三二年ノ建設事業計畫ハ前年未使用ノ材料ヲ利用シ材料ノ不足ヲ補ヒ建築費ノ膨脹ヲ制限シ前年末工事繼續中ノモノヲ完成シ作業

在オデッサ日本帝國領事館

1175

ヲ開始セシムル方針ニシテ工業各方面中製鐵及機械製造業ニ主力ヲ傾注スルコト、セリ
建設事業ノ進捗程度ニ付テハ調査報告充分ニシテ明カナラサル趣ナルカ財政上ヨリ見タル一月ヨリ九月ニ至ル實績ハ國家豫算ヨリ支出セル工業建設費ハ六十三億留、年々プランノ六五%ニシテ豫定通りニ達セザルモ内重工業部所管ノ分ハ八四%ニ及ヘリ而シテ工業自己資金ヨリノ投資ハ豫定年額十九億五千五百萬留中此三期間ニ八億八千萬留即チ四四%ニ止マリ建設事業ハ主トシテ國家豫算ニ依リ行ハレタリ
建設事業資金ハ銀行ヨリ當該企業ニ對シ工事ノ現實ナル計畫及進捗程度ニ應シテ融通セラル、モノナル處工業建設ニ金融ヲナス工業銀

在オデッサ日本帝國領事館

1176

行ニハ工事進捗セラレサル爲メ遊資多ク八月一日六億八千四百萬留
ノ巨額ニ達シタルヲ以テ政府ノ指令ニ依リ之カ利用法ヲ購シタルカ
十月一日現在額五億留ニシテ尙豫定ヲ超過シ居レル由ナリ
而シテ建築事業其モノハ八月迄二年ノプランヲ實行シタル割合ハ
重工業一般四三・九%、内製鐵四〇%、機械製造三九・一%、化學工業
五六%、石油業五二%、石炭業四八%ナリ
建築ハ建築費支出額ノ割合ニ進捗セス支出額ト出來上リタル分トノ
開ハ益々増大シ重工業部所管ノミニテ年末迄ニ約十億留ニ達シタ
リ
建築費原價ハ前年ニ比シ一七%低下ノ豫定ナルカ上半期ニハ反對ニ
一般ニ二七%内製鐵ハ四〇%昂騰ヲ見タリ

在オデッサ日本帝國領事館

1177

炭坑ニ付

建設ノ主ナル炭坑及製鐵ニ關スル狀況左ノ如シ
一九三二年中完成スヘキ新炭坑ハ八十九坑其年産能力三千八百萬噸
ノ計畫ナリシガ一月ヨリ九月迄ノ三期間ニ作業開始セル炭坑十六坑
其年産計畫能力六百九十七萬六千噸ニシテ第四期中四十八坑、千八
百六十萬噸分ヲ完成セシムル豫定ニ對シ二ヶ月間二十八坑其能力約
千四百萬噸完成セルカ右第四期ノ豫定カ全部實現スルトシテモ本年
完成ノ新炭坑ハ合計六十四坑其計畫能力約二千五百五十七萬噸ニシ
テ豫定ノ七割臺トス
一九三二年七月二十七日付ノ炭坑建築ノ現狀ニ關スル勞動國防會議

在オデッサ日本帝國領事館

1178

ノ決定ニ依レハ當時建築中ノ炭坑ハ全國總數三百五十坑其能力二億
 三千萬噸内、東方ニ在ルモノ百六十六坑其能力一億二千萬噸ナルカ建
 築工事ハ五年乃至七年ノ長キニ及ビ、工事ノ質不良ニシテ工費徒ニ嵩
 ミ、一九三一年中營業部ニ引渡タル炭坑六十坑其能力二千七百三十
 二萬噸（内、ドンバス三十一坑、千五百九十三萬五千噸、ヤクヌバ
ス十四坑、五百五十八萬五千噸）ハ工事完了セス、裝備未完ノモノナ
 リシト
 尙勞働國防會議ハ右決定ヲ以テ一九三二年起工ノ炭坑ヲ四十四坑其
 能力四千六百八十五萬噸内、クヌバス十三坑、三千八百八十萬噸、ヤ
カラガンダ七坑、五百六十萬噸、ノモスクワ十四坑、四百二十萬噸
 等トシ、從來ノ如ク無準備ニテ開鑿ニ着手スルヲ嚴禁シ、工事ノ集中方

在オデッサ日本帝國領事館

127

1179

ヲ嚴命スル處アリタリ
 製鐵業
 熔鐵爐
 一九三二年完成スヘキ熔鐵爐ハ第一期八基、第二期二基、第三期三
 基、第四期十一基、合計二十四基、其容積二萬九千九百二立方米、生産
 能力六百九十二萬七千噸、本年ノ生産高二百七十萬噸ノ計、鑿ニ對シ
 實績ハ上半期中ニ七基、其容積五千三百七十二立方米、後半期ニ作業
 開始ノモノ三基、其容積約二千立方米、合計十基、其容積七千七百二十
 三立方米、年産能力二百三十萬噸ナルカ、其中新築七基、六千四百八

在オデッサ日本帝國領事館

128

十四立方米ニシテ三基ハ復興セルモノナリ尙ヤマグネトゴルスク
 第一號(容積一八〇立方米)及カヂエフ第二號ハ前記計畫ノ
 二十四基ノ計算ニ入ラサル前年ノ工事遅レタルモノニ屬ス
 右一九三二年中完成セル十基ノ熔鑛爐ハ左ノ如シ

工場	爐數	各容積 立方米	各能力	備考
マグネトゴルスク	二	一八〇	三五八	一號一月火入 號四月火入
クズネツ	二	八二六	二五五	一號四月火入 號七月火入
ユソゴル	一	七〇〇	二四〇	第三號下半年 火入
ゼルジンスキイ	一	九三〇	三〇四	第七號上半年 火入

在オデッサ日本帝國領事館

141

トムスキイ	一	八四二	二六四	第六號上半年火入
D3MO1	一	四八〇	一六二	第一號下半年火入
フルンゼ	一	四〇〇	一二五	第二號上半年火入
カヂエフ	一	三五九		第二號上半年火入
計	一〇	七七二三		

右ノ外大改造ヲナセルヤルイコフヤ工場第三號熔鑛爐(容積七九〇
 立方米、製造能力一日六百噸)ハ十二月二十二日火入ヲナシ初日七
 十噸ノ純鐵ヲ製出セリ
 一九三二年中完成セシムヘキ計畫ノ熔鑛爐ノ工事ハ右ノ如ク遅延ニ
 遲延ヲ重ネ金屬工業本廳完成委員會ハ每期毎ニ完成見込ヲ延引セサル
 ヘカテサルニ至リ十一月中一九三三年第一期ニ持越タル工事中ノ

在オデッサ日本帝國領事館

182

四基ノ中一月初ノ調査ニ依レバ同期中ニ完成スルハ二基ノミトナ
 リ残り十七基中一九三三年中完成計畫ノモノ十五基ノ豫定ニシテ
 マグニトゴルスクヤノ二基ハ次年ニ廻ハサレタリ
 製鋼爐²² 12
 一九三二年統制數字ニ依レバ同年中製鋼爐六十三基ヲ完成作業セシ
 ムヘキ計畫ナリシ處実績ハ十八基、其面積五百六十六方米ニシテ右
 ノ内六六・五米ノ大型爐ハ二十七基ノ豫定ニ對シ、クズネット⁰ノ三
 基、四〇・七方米ノモノ三基ナリ
 而シテ當局カ十一月中工事遅延ノ爲メ作業開始期ヲ十二月及一九三
 三年第一期中ニ持越タル製鋼爐十四基ト定メタルモノ、内十二月

在オデッサ日本帝國領事館

131

183

完成セルモノ一基ナルカ一月ニ至リ残り十三基ノ内豫定通り完成見
 込ノモノ八基ト改ムルニ至レリ
 而シテ一九三三年完成豫定ノ製鋼爐ハ五十一基ナルニ付大部分ハ三
 二年豫定未遂行ノ爲メ同年ニ持越セルモノトス
 電氣爐ハ十二基ノ計畫ニ對シ二基(？)ノフリユミンク⁰ハ七基
 ノ豫定ニ對シ試験中ノモノ一基(クズネット)アルノミ
 壓延臺ハ二十一基ノ豫定ニ對シ二、三基完成セルノミ(クズネット
 ク、アレール)ノ壓延臺ハ十二月(一九三三年)ノ完成豫定ハ十五基ナ
 ルニ付全部前年ヨリ持越ノモノナリ

在オデッサ日本帝國領事館

132

E-0287

0088

184

其 他

製鐵及石炭以外ノ各種工業ノ工場建設ニ付テハ其重ナルモノ、完成豫定カ實現セラレタリヤ左ニ概觀スヘシ

發電所

本年電化投資額ハ統制數字豫定ノ八億留ニ對シ実績概算七億四千萬留ナリ本年中完成セル發電所ノ重ナルモノ左ノ如シ(單位キロワツ)

ドネブル	燃料	全能力	現在能力
水力	五八八	三一〇	

在オデッサ日本帝國領事館

133

185

カシテ	水力	一八六	一七四
ゾラ(アルメニヤ)	水力	二二五	二二五
ゴリコフ(ニイジエゴロド)	泥炭	一五八	一三八
チエリヤビンスク	地方炭	七五	七五
マダニトゴルスク	同	三六	三六
クスネツ	同	一二	一二
ゼルジンスカヤ	内燃機關	四八	二四
ツウエフ	同		一五〇

リ6
斯クシテ水力發電所ノ「スウイル」ヨリオン、泥炭ノ「ツプロフ」カ(十萬キロワツ)等ハ一九三三年ニ完成ヲ期スルコト、ナレ

在オデッサ日本帝國領事館

134

146

有色金屬

有色金屬工場中豫定ノ如ク本年内完成セルモノハ、ウレニングラド
アルミニウム工場（年産能力六千噸）ノミニシテ、ウクラ
スノウラル製銅工場（年産能力二萬噸）ドネブルアルミニ
ウムコムピナト（二萬噸）ウラルノウフアレイスキニツケ
ルコムピナト（三千噸）中亞ノ製鉛カズポリメタル（六萬
噸）ノオルジョニキゼ（北高架索）及チエリヤビンスク（二
萬噸）ノ亞鉛工場等ノ完成ハ一九三三年ニ延ビタリ

機械製造工場

在オデッサ日本帝國領事館

135

147

又

機械製造工場キ於オハ、ウラノボルベアリング工場（
第一次）フレゼル工場完成シタルガ、ニイジエゴロド自動
工場、チエリヤビンスク、トラクター工場、サラトフコム
パイン工場ハ一部完成、他ノ大部分未完成ノウラル機械工場
ウクラマトルスキ機械工場、ニイジニイタギル車輛工場ハ
一九三三年ニ作業ヲ開始スルコトナレリ

化學工業

化學工業ノ大工場中完成營業開始ノモノニ、ウオスクレセンスキ
コムピナト（硫酸）ドソンノ等アリ。ウベレヌコフ、ウボ
プリキ等ノ大コムピナトハ一部完成營業シタルガ其大體ハ一

在オデッサ日本帝國領事館

136

149

泥炭 一六〇
頁岩 一三三・八
八六・五
一〇・五
一五・六

本年採收各種燃料ヲ火力ニ依ル燃料單位ニ換算スレハ一億百二十萬噸ニシテ豫定ノ一億三千五十萬噸ニ對シ七七・五%ナリ。而シテ本年ノ使用高ハ豫定ノ一億九百二十萬噸ニ對シ一億二百五十萬噸即チ九三・六%ニシテ年末貯藏高豫定ノ二千百三十萬噸ニ對シ使用超過高百三十萬噸ナリ。前年度殘高ハ約五十萬噸見當ナリ。實際ハ多少ノ貯藏高アリ右ノ不足ハ地方的燃料ヲ以テ補ヒ甚々^ナハ工場ニ穀穀ヲ使クモノサヘアリ。

在オデッサ日本領事館

138

148

九三三年ニ延ビタリ。

燃料ノバランス

石炭	九〇〇	六二四	六九四	五三五
内 ド ン バ ス	五六〇	四四〇	七八六	四〇三
石油	二七四	二二三	八一〇	二二九
プラン				一九三一年
実績				
對プラン%				

一九三二年ノ各種燃料ノ採掘高ハ左ノ如シ。(單位百萬噸但シ頁岩ハ千噸)

在オデッサ日本領事館

137

E-0287

0091

190

産業組合ノ生産

産業組合ハ本年中幾多ノ助成法ヲ講セザレタルカ、イヌベスチャ
 (十二月二十八日)所報ニ依ルニ、マフセコプロムソヴエトノ系統ノ
 産業組合ノ總生産高ハ五年計畫ノ四十億二千五百萬留ノ豫定ニ對シ
 一九三二年十一月半ニ四十二億七千四百四十萬留ノ實績ヲ示シタリ
 工業各部門中金屬、製革毛皮業及建築材料等ハ組織上ノ缺陷ノ爲メ
 豫定ニ達セザルコト一八・二七%ナルカ好成績ノモノ、生産年額左

在オデッサ日本領事館

139

川

191

ノ如シ。(單位百萬留)

燃料及鑛業	一九二八年	一九三二年
建築材料	一九七	四三二
運送	一五五	二五五四
麻業	七五	五四二〇
雜貨	三九五	六一二
學術美術品	五一	二一五〇
廢物利用	一九一	二〇二〇
	七九	二五五二
		一三四二

組合員ハ一九二八年頭ノ百萬四千人ヨリ三一年末ニハ二百三十五

在オデッサ日本領事館

140

川

6

1913

作付地積 <small>3)</small>	單位	プラン	實績	% 對プラン	對前年%
	千ヘクタール	四四〇〇〇	一三六三〇〇	九四六	(136300)

農業ニ關スル本年統制數字預定ノ重要項目ニ付其實績ヲ表ホスレトシ
左ノ如シ

農業 423

在オデッサ日本領事館

142

1912

萬三千人トナリ資本金ハ此期間ニ五千二百萬留ヨリ四億四千八百萬留ニ増加シタリ

在オデッサ日本領事館

141

E-0287

0093

1940

(四) 農具生産高	向日葵	亞麻	棉花	甜菜	穀物	(三) 收穫率	内 春 蒔 作 物	M T G	内 春 蒔 作 物	千 ヘ ク タ ル
	六〇	二六	八七	一四五〇	八五		三二〇〇〇	四八〇〇〇	七六〇〇〇	六
	四四	二〇	七四	七五七	七〇		三△ 五二九五	四 五〇〇〇	六▲ 六七〇五	
	七三〇	七七〇	八五〇	五二〇	八二〇		一△ 〇〇八	九 三三七	▲ 九五三	
	/	/	/	/	(七八)					

在オデッサ日本領事館

144

1940

コ ル ホ ズ	内 春 蒔 作 物	ソ フ ホ ズ	(二) 社 會 部 門 別	冬 蒔 地 積	甜 菜	亞 麻	棉 花	穀 物	内 春 蒔 地 積	千 ヘ ク タ ル
一〇八〇〇〇	一四〇〇〇			四三〇〇〇	一六七〇	二五六〇	二四三七	一〇二〇〇〇		
九〇〇〇〇	▲ 一一〇二一			● 三六七二八	一六三五	二五〇〇	二三四八	▲ 六一八七五		九九七一
八三三	▲ 〇五八			● 八九八	九七九	▲ 九九〇	▲ 九五五	▲ 九二〇		九七七
(八〇二九)		(D.五三)			一〇九〇	一〇七〇		▲ 九九六		

在オデッサ日本領事館

143

E-0287

0094

1917

年ニ近似シ居レリ。然レトモ冬蒔作物ノ作付成績ハ下降シ右表記載ノ計數ヲ前年十一月十日即チ十日早キ時期ト於テ三千七百四十萬「ヘクタール」ニ比シ約二%減少セリ。

社會部門ノ作付地積ノ比重ハ八四六%トスル豫定ナリシモ七九・九%ニシテMTCヲ利用セサル「ヤコルホズ」及個人農家ノ割合ハ減退セリ。

收穫率ノ豫定ハ前年ヨリ低下セルモ実績ハ更ニ低下シタリ。右ハ作柄ノミニ因ルニ非スシテ收穫高ノ概算ヲ作付地積ヲ以テ割出セルモノナレハ作付地積報告ノ過大^{村作及}收穫法等ノ不良等ニ依ルモノ多ク天候不良ニシテ不作ナリシハ極メテ小サキ一部地方ニ限ラレタリ。

在オデッサ日本領事館

146

1916

備考 ▲印ハ七月一日現在數、△印ハ六月二十日現在數、●印ハ十一月二十日現在數、()ハ絶對數ニシテ%ニ非ス。

農業機械 MTC數 (年末現在)	右所有トラクター		農業投資額
	千馬力	百萬留	
所	千馬力	百萬留	百萬留
三、一〇〇	一、三六〇	四三六〇	四三六〇
三、四四六			
(1,500)			

本年ノ作付地積ハ種子及農具ノ不足、農民ノ作付不熱心等ノ困難アリシモ実績ハ大體豫定ニ近ク「プラン」ノ實行率モ一九三一

在オデッサ日本領事館

145

199

一九三二年鐵道ニ關スル豫定計畫ノ実績ハ大體左ノ如シ

單位	プラン	実績	對 ン %	對 前 年 %
鐵道	〇〇〇	—		

第 三 運 輸

425

在オデッサ日本領事館

148

川

194

牛 畜産ニ付テハ本年現在頭數ニ關スル中央執行委員會認可ノ統制
數字ト実績トオホキハ左ノ如シ(單位千頭)

牛	ソフホズ	コルホズ農場	実績	對 ブ ラ ン	對 前 年 %
	ソフホズ		二九五〇	七一〇	一〇〇
	コルホズ農場		二一〇〇	〇	〇
	ソフホズ		五五〇〇	、	、
	コルホズ農場		四九〇〇	三三〇	九五〇
	ソフホズ		四五〇〇	五八〇	、
	コルホズ農場		二六〇〇	六〇〇	九二〇
	ソフホズ		七三〇〇	六〇〇	、
	コルホズ農場		九〇〇〇	五六〇〇	、
	ソフホズ		六三二	六三二	、

シ居ルモノトス

在オデッサ日本領事館

147

川

207

鐵道建築 12 月
 交通部長ノ報告ニ依ルニ一九三二年ノ鐵道工事ハ新設線ニ一萬五千件、舊線ニ二萬五千件アリ其内七三%特急工事ナルカ豫定通り進捗セズ統制數字ニハマキネクワリ
 マグニトゴルスクリンクマネットワーク幹線及マドンバスヨリ各地方ヘノ貨物搬出路線ヲ年内中ニ完成ヲ圖ルヘキ旨記載アルモ一モ實現セス其代リニマクイブイシエフヤ報告ニ依レハマアムール
 鐵道マカリムスカヤマウルシヤ一瞬間複線敷設工事アル由ナルカ右ハ滿洲奉天ノ對策トシテ初メハ秘密ニ着手セラレタルモノナリ
 交通部長「アンドレフ」ノ報告ニ依レハ本年十ヶ月間軌條敷設ノ

在オデッサ日本領事館

208

備考	客車	貨車	機關車	レール供給量 千噸	貨物機車走行 里(十ヶ月)	輸送貨物 (十ヶ月)		旅客 百萬人	輸送貨物高 百萬噸
						十億噸	十億噸		
△八十ヶ月間、▲八十一ヶ月間計數	10	10	臺	噸	千	十億噸	十億噸	百萬人	百萬噸
	37000	1250	500	128	167			890	320
	△13435	△675	▲250	994	1660	1428	△815	△815	265
	△833	0	0	0	0	0	0	0	6
	△994	△13629	△653	▲248	(909)	(1597)	△1380	△1380	1039

在オデッサ日本領事館

202

延長合計三千杆内新線千杆、複線七百二十杆（ヤアムール線ハ此部ニ入ルナラム）停車場一三五〇杆ニシテ其外ニ線路工事ヲ了リヤレールノ數ク許リニナリ居ルモノニ七五〇杆アルヲ以テ年末迄ニハ總計四千杆ノヤレールノ數設ヲスルコト、ナルヘント

鐵道輸送ノ成績ハ右表ノ通りニシテ一日平均積出貨車數ノ年平均數ハ五萬五百車ナルカ此平均數ヲ超過セル月ハ一、四、五、六、九、十、六ヶ月ニシテ八月最低ニテ四七、二四五車ナリ而シテ六月以降ハ前年ヨリモ減少セリ右ハ主トシテ荷物ノ出廻減少ノ爲ナリ然ルニ輸送旅客ハ激増シ輸送不能ノ旅客尙多數アル實狀ナリ

列車運轉方面ハ貨車及機關車ノ走行里數ニ依テ見ルモ大ニ改善

在オデッサ日本領事館

209

セラレタルヲ見ル給水モ前年ノ如ク不足ヲ感セサルニ至リ機關車及車輛修繕事業及ヤデボ等ノ設備モ前年ニ比シ著シク改善セリ

ヤレール及車輛ノ新造供給ハ前年程度又ハ夫以下ナリ

住宅建築ハ本年完成引渡豫定ハ七十五萬八千方米ナルカ九月一日迄ニ交通部カ引渡ヲ受ケタル分ハ豫定ノ二〇%ナリト

右ノ如ク一九三二年ノ鐵道ニ於テハ旅客カ運ヒ切レヌ程アリタルト列車運轉及車輛修繕方面ニ於テ改善アリタルモ新線敷設工事、車輛新造建築ニ於テ不成績ニシテ貨物ノ輸送ハ國民經濟他方面ノ不振ニ依ル荷物ノ減少ニテ二割近クノ缺陷ヲ示シタリ

在オデッサ日本領事館

209

井河川運輸 1901

河川等内水運輸ノ實高ハ流木ヲ合算シテ一九三〇年ハ六千三百二十萬噸、一九三一年ハ七千二百六十萬噸内流木ヲ除キタル國營汽船部輸送高ハ一九三一年四千九百六十萬噸ナリシ處一九三二年ノ統制數字ハ流木ヲ合算シテ一億々千四百萬噸輸送計畫ナリシカハ水運部機關雜誌ニ依レハ勞働國防會議委員會認可ノ國營汽船部ノ輸送（流木ヲ除ク）各月々プランヤハ六千二百二十八萬九千三百噸ニシテ十一月二

在オデッサ日本領事館

秋

6205

穀物	プラン	實績	對前年%
セメント	四三六一	三七六一	八六二
礦物建築材料	九七三二〇	五三二七五	五四七
食鹽	一、四〇七一	八五六二	六〇八
木材（船舶ニ依ル）	八八〇九五	六九五九一	七九〇
同（筏ニ依ル）	二、三四五八七	二、八四四四	九七四
石炭	八八三七	五四五一	六一七

十日即チ實際ノ航行停止期迄ニ五千二百二十三萬七千三百噸、右ハプランヤノ八三六%ヲ實行シ一九三一年ニ比シ三・二%ノ増加ナリ
右輸送量ノ貨物別オホキト左ノ如シ（單位千噸）

在オデッサ日本領事館

秋

206

石油	七八八九九	七二一四四	九一四一〇	一一
其他	五一二六六	四四二三四	八六三	七五八
計	六、二八九二	五、二三七三	八三、六一〇	三、三二
内客貨船ニ依ルモノ	三、四七三、三	二、八六一、八	八二、五	八三、八

右ノ如ク主要貨物中、ブランクヤ通りノ輸送ヲナセルモノ一種類モナク、就中穀物、礦物建築材料、食鹽、石炭等缺陷甚キ、前年ニ比シ總體キ於チハ三、二%増加ナルカ穀物、食鹽等ハ減少シ、其他ニ於テ増加ヲ來セリ。

穀物食鹽等ハ前年ニ比シ生産減少シ、其他モ豫定ノ生産額ニ達セザリシ等ノ原因アルト共ニ運輸部側ノ責任ニ歸スヘキ原因アリ、就中新造船舶ノ建造引渡遅レタルヲ主トス。

在オデッサ日本領事館

207

九月一日迄ニ引渡ヲ受ケタルモノ左ノ如シ。

汽船 三五七五〇馬力ノ代リニ 一、三二一〇馬力

送油船 積載量九八七五〇噸ノ代リニ 六四七五〇噸

又他ノ資料ニ依ルニ十月一日迄ニ豫定ノ汽船九十六隻ニ對シ七十一隻(七四%)其馬力二萬九千馬力ニ對シ一萬六千馬力(五五%)及舩舟五十五隻ノ引渡ヲ受ケタリト

尤モ一九三一年ニハ新造汽船七十四隻、舩舟五十二隻ナリ

海運

在オデッサ日本領事館



209

労働者勤務者数 百萬人	單位	実績	對プラ	對前年%
	プラン			
消費物品供給高 百萬留	三 五 五 〇 〇	三 九 六 〇 〇	一一 一 〇	一 四 六 〇
勞働者勤務者數 百萬人	二 一 〇	二 三 三 一 〇	六 一 一	一 九 〇

供給労働及其他ニ關スル統制數字記載ノ重要項目ニ付実績ノ分リ居
ルモノヲ示キト左ノ如シ

第四 供給労働及其他

433

在オデッサ日本領事館

208

海港ノ荷扱高ハ一九三一年ノ実績四千八百九十萬噸ニ對シ一九三二
年統制數字ハ六千八百二十五萬噸ノ豫定ナリシ處概算五千十萬噸ノ
見込ニテヤプランノ七三・四%ニ當リ前年ニ比シ三・四%ノ増加トス

在オデッサ日本領事館

210

勞銀基金總額	百萬留	二六八〇〇	三〇三二一	一三〇一	四三〇
一人ノ年平均勞銀額	留	、、、	一、三五六	、、	(一、七三)
國民所得	百萬留	四九二〇〇	四五一〇〇	九、六	一一九、四

備考 (一)ハ絕對數

一九三二年國民經濟ノ全般ニ付テ見ルニ農工業生産ハ豫定計畫ニ違
セサルニ勞働者及勤務者總數ハ之ヲ超過シ勞銀額ハ勞務者増加ノ割
合ヨリモ更ニ増大シ國民所得額ハ豫定ニ違セサリキ但シ前年ニ比シ
二割近ク増加セリ。

右統計及社會保險其他ノ社會施設ニ依リ人民ノ生活狀態ハ非常ニ改
善セラレタルヤニ當局ハ吹聴スルモ勞働者ノ實際生活ハ日常生活必
需品ノ缺乏、價格暴騰ニ依リ益々困難トナレリ例ヘハ一九三二年ノ

在オデッサ日本領事館

211

勞務者一人當リ年平均勞銀ハ一九二八年ニ比シ六七%増ノ割合ナル
カ配給所ヨリ受クル黒パンノ價格ハ四百瓦ニ五哥ニ對シ一九三
二年末九哥トナリ肉ハ一九二八年一週三回一疋宛四十五哥ニテ配給
セラレタルモ現今ハ配給ナキノミナラス他ニテ殆ント調辨シ難ク砂
糖ハ一九二八年一ヶ月二疋、一疋三付五十哥ナリシカ現在ハ配給ナ
ク市場及國營商店ノ賣價十五留、種油ハ一ヶ月一疋宛四十八哥ニテ
配給アリシカ今ハ悉無ク市場ノ賣價ハ十八留トス右基本食物ノ例ノ
如ク他ノ食料品價格モ暴騰セル結果月收百八十留ノ普通勤務者カ其
三割ニ當ル住居費、租稅公課、公債、寄附金等ヲ差引タル殘カノ百
二十留ヲ以テ如何ナル生活ヲ得ルヤ容易ニ想像シ得ヘシ。

在オデッサ日本領事館